



Nippon Sport Science University
Center for Olympic and Paralympic Empowerment

平成28年度 スポーツ庁委託事業

「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

報告書

平成29年3月 日本体育大学

はじめに

本事業はオリンピック・パラリンピックの理念に基づきながら、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進を行うことを目的に実施されました。事業の柱は次の2点でした。①オリンピック・パラリンピックそのものについての学びを全国的に普及し、ムーブメントを醸成するための活動を行う。②オリンピック・パラリンピックを通じた学びを国民的レベルで深めるための支援活動を行う。具体的には日本体育大学を拠点として石川県、高知県、長崎県の各教育委員会と連携しながら、学校や地域における「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント」の醸成を行いました。

クーベルタンに端を発し、IOCがそれを受け継いでいるオリンピックの理念（オリンピズム）は次のように述べられています。「オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である」。「オリンピズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てることである」。(IOCオリンピック憲章2016年版、JOCウェブサイト翻訳による)。

また、パラリンピックの価値は、「勇気」、「強い意志」、「インスピレーション」、「公平」であり、そのムーブメントは「パラリンピックスポーツを通して発進される価値やその意義を通して世の中の人に気づきを与え、より良い社会を作るための社会変革を起こそうとするあらゆる活動」(JPCウェブサイトより)を意味します。

本事業ではオリンピックの理念・哲学であるオリンピズムとパラリンピック・ムーブメントを基本精神として事業計画を立て、オリンピック、パラリンピックの方々へ直接赴いていただき講演や体験活動を行うと同時に、教育セミナーや市民フォーラムを通してオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを展開して参りました。

本報告書に記載されている取り組みが、2020年東京大会に向けたムーブメント展開のきっかけになることを願うとともに、スポーツがオリンピズムで述べられている人々の生き方の創造や平和でより良い社会構築の推進に力を与えていくことを期待しています。

平成29年3月

スポーツ庁委託事業オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業
日本体育大学事業統括 学長 谷釜了正

目 次

✚ 本事業の概要	
1. 本事業の目的と方法	1
2. 推進ネットワーク体制	2
3. 本事業の実施スケジュール	3
✚ オリンピアン・パラリンピアンとの体験活動講座	
1. 石川県	5
2. 高知県	10
3. 長崎県	11
✚ 市民フォーラムの開催	
1. 高知県	19
2. 長崎県	20
✚ 教育現場における具体的な授業プログラムの作成	
1. 長崎県	24
✚ 教員向けワークショップの開催	
1. 長崎県	50
✚ その他の取り組み	
1. 研究授業・セミナーへの参加	52
2. ポスター作成／ラッピングバス／デジタルサイネージ	53
✚ シンポジウムの開催	54
✚ 資料 学校だより・新聞掲載記事一覧	57

本事業の概要

1. 本事業の目的と方法

<目的>

本事業は、オリンピック・パラリンピックの理念に基づきながら、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進を行うものである。事業の柱は次の2点である。

- I. オリンピック・パラリンピックそのものについての学びを全国的に普及し、ムーブメントを醸成するための活動を行う。
- II. オリンピック・パラリンピックを通じた学びを国民的レベルで深めるための支援活動を行う。

オリンピック・パラリンピックを通じた平和への貢献を国民レベルで成し遂げるために、本事業では3つの自治体（石川県、高知県、長崎県）と連携し、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの醸成を図る。

<方法>

本事業は、以下の方法で実施した。

(1) ネットワーク構築

各県とオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進活動の展開について確認し、本事業の実施に関するネットワークを構築した。教育委員会を中心にして体育協会、各種スポーツ団体、NPO 法人などとのネットワークを構築し、イベントや教育プログラムの共同立案・実施のための体制を整えた。

また学校教育におけるムーブメント醸成を行う目的で、教育委員会との連携のもとに県内に「オリンピック・パラリンピック教育推進校」を設置し、学校教育におけるオリンピック・パラリンピックの理解と醸成を図った。

(2) オリンピアン・パラリンピアンとの体験活動講座

各県に講師・スタッフ・学生を派遣し、各地でオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進活動を行った。具体的には主に高等学校の授業へ講師等を派遣して講演会を行う形態で実施した。

(3) 市民フォーラムの開催

各県においてオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進フォーラムを開催した。実施にあたっては体育協会、各種スポーツ団体、地元の新聞社などのメディア、NPO 法人、大学などと連携しながら内容、講師、広報等を検討して進めた。

(4) 教育現場における具体的な授業プログラムの作成

推進校において体育科、保健体育科の授業、特別活動を軸として、当該校での充実のもとより、他校でも実践できる授業プログラムを教育委員会との連携のもとで作成した。具体的には推進校で行ったオリンピック・パラリンピアンとの体験授業を題材として活用し、様々な教科の授業プログラムへと展開した。

(5) 教員向けワークショップの開催

各県の教員を対象に、オリンピック・パラリンピックに関する知識をもとに学校現場での授業づくりに向けたセミナーを開催した。事例共有や学校現場からのフィードバックを踏まえ、より効果的な教育プログラムの開発へとつなげた。

(6) 全国への情報発信

本事業に関するホームページを構築し、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントの成果や情報を全国へ発信した。さらに、各県教育委員会からパネリストを招いてシンポジウムを行い、成果を広く共有した。また、報告書を作成することにより事業を検証し、成果をまとめた。

2. 推進ネットワーク体制

日本体育大学は、普及・推進地域である石川県、高知県、長崎県の教育委員会と推進ネットワーク体制を構築した。各地域では、教育委員会に教育委員会内外の調整を依頼し、推進校の選定・統括、オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座、市民フォーラム、教育現場における具体的な授業プログラムの作成および教員ワークショップ運営への協力を得た。

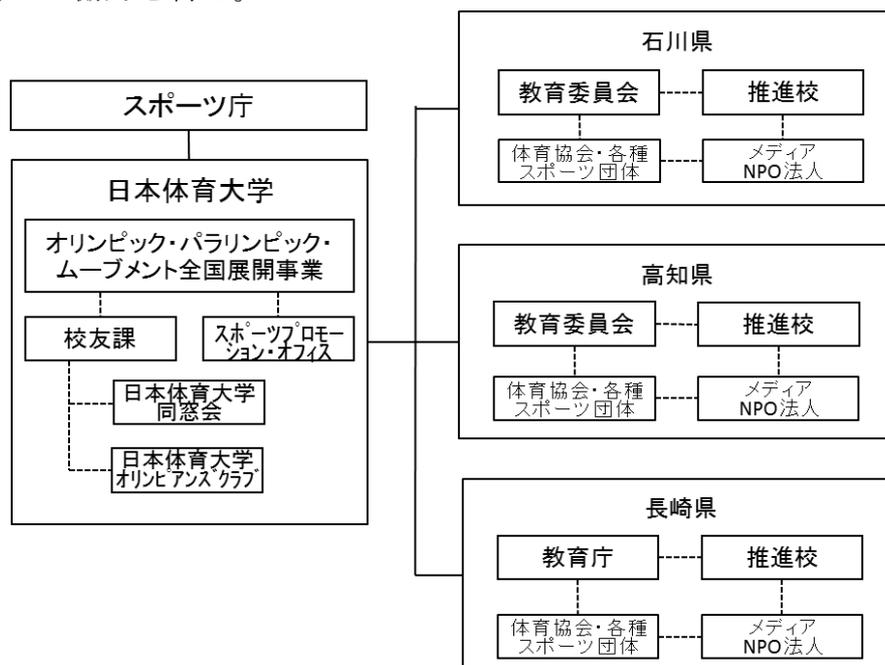


図1：本事業の体制図

3. 本事業の実施スケジュール

平成28年9月16日付けでスポーツ庁と日本体育大学との委託契約が締結されて以降、事業は下記のとおり推進された。

<9月～10月>

- ・連携する石川県・高知県との事業打ち合わせを行った。
- ・連携する長崎県への再委託手続きを行った。
- ・各県の進める事業スケジュールに沿って、連携を開始した。

<11月～2月>

- ・各県で行われた、オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座、市民フォーラム、教育現場における具体的な授業プログラムの作成、教員向けワークショップの各事業に、講師とスタッフを派遣した。
- ・派遣のために必要となる各県教育委員会や各県推進校との連絡調整、体育協会や大学など関係団体との交渉、講師選出と交渉、交通手段・宿泊の確保、補助学生の手配、会計処理などを行い、各事業を期間内に進めた。
- ・各県教育委員会や教員に、先行する東京都のオリンピック・パラリンピック教育や企業プログラムを知る機会を提供するために、研究発表やセミナーの情報を共有し参加のための手配を行った。

<1月>

- ・本事業のホームページを開設し、情報発信を開始した。

<3月>

- ・シンポジウムを開催して、本事業の成果と課題を共有した。
- ・報告書を作成して本事業の成果を検証し、まとめた。

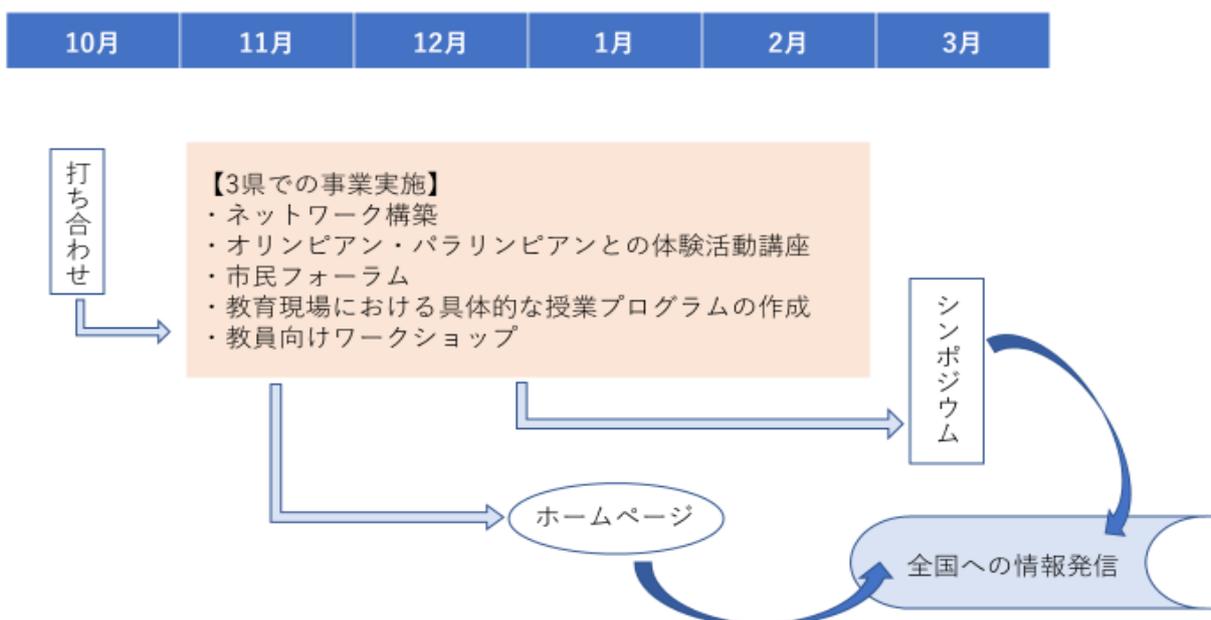


図2：本事業の実施スケジュール

✦ オリンピアン・パラリンピアンとの体験活動講座

本事業では、11月から1月にかけて計12回、各県においてオリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座を開催した。本講座は、推進校の児童生徒やイベント参加者を対象に、オリンピック・パラリンピアンを講師として迎え、以下の3つの内容を通してオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進に繋げることを目的として実施された。

- (1) 大会の経験や競技人生に関する講話
- (2) オリンピック・パラリンピックの意義や価値、大会を取り巻く社会や大会を支えるしくみ等に関する講義
- (3) オリンピック・パラリンピック競技種目の体験講座

実施にあたっては、各県の教育委員会、各種スポーツ団体、各県出身のオリンピック・パラリンピアン、障害者スポーツ協会などと連携しながら進めた。

<事業後アンケート>

どの事業においても「成果があった」と評価された。一方で、講師決定から事業実施までの時間が充分にとれなかったため、日程や講師の早期決定や、それに伴った事前周知の充実を課題とする意見も出された。

感想

- ・夢を持って努力する人の「ものの考え方」や「心構え」に触れることができた。
- ・教科書ではなかなか伝えることができないので、実際にオリンピックに話を聞くことができたことは、大変貴重で有難い経験だった。
- ・困難を克服し目標を達成することの尊さを生徒たちが感じ取ってくれた。
- ・オリンピックに出場するまでの挫折を聞くことができ、スポーツ人生も順風満帆ではなく「失敗すること」も大切な経験だという視点も学ぶことができた。
- ・オリンピックを競技としてだけでなく、大きな祭典としてとらえることができるようになった。スポーツのもつ大きな力・可能性を感じることもできた。

以下に、各県において開催された体験活動講座の概要について報告する。

1. 石川県

【1：講師 2：プログラム 3：内容】

日時	平成28年11月3日（木）9：00～13：00
事業名	第11回いしかわっ子駅伝交流大会
会場	石川県西部緑地公園陸上競技場周辺特設周回コース
主催	石川県・石川県教育委員会
主管	いしかわっ子駅伝交流大会実行委員会
後援	北國新聞社
協力	一般財団法人石川陸上競技協会
参加者	1182名（石川県内小学校5・6年生）
1.	<p>中川真依（水泳/飛込み） 中田大輔（株式会社エアリアルドリーム：体操/トランポリン） 宇野慶子（MC Freely：トークショー司会）</p>
2.	<p>9：00～ 開会式 9：40～ 女子駅伝の部 10：30～ 男子駅伝の部 11：20～ 男子記録会（中田大輔選手 同走） 11：40～ 女子記録会（中川真依選手 同走） 12：00～ オリンピアントークショー 中川真依、中田大輔、宇野慶子 12：20～ 閉会式</p>
3.	<p>駅伝の部では、オリンピック選手のお二人がトラックの中に入り、襷を繋ぐ子供達のすぐ近くで声をかけて応援した。記録会の部では、走る直前に両選手から子供達に向けて頑張ろうというエールの言葉を送り、記録会に臨んだ。両選手はそれぞれ子供達と一緒にスタートし、子供達を励ましながら1.5kmを同走した。両選手とも最後尾の生徒を励ましながら一緒にゴールし、走り終えた後は子供と握手して健闘を称えた。</p> <p>トークショーでは、競技を始めたきっかけやオリンピック出場に至るまでの経験をインタビュー形式で話していただき、スポーツを通して、目標や夢を持つことの大切さを学んでほしいと子供達に伝えた。</p>



スタート時



トークショーの様子

日時	平成29年1月19日(木) 13:40~16:00
事業名	石川県オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	石川県宝達志水町立押水第一小学校
参加者	実技：79名(3・4年生36名、教職員5名、保護者38名) 講演：89名(5・6年生39名、教職員7名、保護者43名)
1. 室伏由佳(株式会社 attainment：陸上競技/ハンマー投、円盤投)	
2. 13:40～ 実技(3・4年生合同) 講師紹介 実技 15:00～ 講演(5・6年生合同) 講師紹介 「可能性への挑戦 ～競技スポーツの経験を通して～」 室伏由佳 質疑・感想発表	
3. 実技では、自己紹介ゲーム、じゃんけんゲーム、6人組での身体動かし、ジャンプ遊びを実施し、お互いを知らない児童同士でも積極的にペアをつくり楽しんだ。競争の要素も取り込みつつ、各ゲーム終了後はお互いの頑張りを認め合い、拍手で称え合った。「運動はみんなで気持ちを一つにしてやると、何倍も楽しくなる」とお話しになり、実技を終えた。 講演ではまずオリンピックについて、オリンピズムやオリンピックの3つの価値について、自身の経験もふまえながら紹介した。父親の影響で幼少期から海外の人や文化と触れあい、父親がオリンピックに出場している姿を見たことがきっかけでオリンピックを目指すようになったと伝えた。上手くいかない時は仲間に支えて貰い、諦めずに努力を続けることで結果がついてきたとお話になり、アテネ五輪では予選落ちではあったがとても充実しており、それまでに努力してきたことが一番大事だと思ったと語った。また、「諦めない、決めつけない、思い込まない」という言葉を児童と一緒に声に出して読み、これらを大切にしたいと伝えた。 講演後には、「諦めずに最後までやり抜こうと思った」「出来ないことを出来ないとは決めつけずに、最後までやろうと思った」など、児童がたくさん感想を発表した。	



実技・講演の様子

日時	平成29年1月20日（金）13:55～15:35
事業名	石川県オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	石川県野々市市立野々市小学校
参加者	105名（6年生97名、教職員8名）
1.	柳瀬彰良（白鵬女子高等学校教諭：水泳/水球） 日本体育大学水球部部員3名
2.	13:55～ 実技 講師紹介 実技 14:50～ 講演「夢をあきらめない」 柳瀬彰良 実技体験 質疑
3.	<p>実技では、二人組で背中にボールを挟んだ状態でリレーを行うボールリレーを実施した。1回目終了後は、どのようにすれば1回目よりも速くゴールすることが出来るかを話し合う時間を設け、各チーム意見を出し合い2回目に臨んだ。全チームゴール後は、オリンピックの価値にもある友情、敬意/尊重の精神で、順位に関わらずお互いの頑張りを認め合い、お互いに拍手で努力を称えた。その後は水球ボールを使用して、児童一人ずつが選手と片手でパスを行った。</p> <p>講演では、まずはオリンピックについて日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピックの意義や価値等について説明した。「もちろん勝つことは嬉しく目標として目指すが、負けたら駄目という訳ではない。目標に向かって全力で取り組み、努力を続けることが大切。結果が悪くても、その人は努力をすることによって必ず成長する」とお話になり、スポーツに限らず人として日々向上していくことを目指す考え方を伝えた。また、水球を始めたきっかけからオリンピック出場の夢が叶うまでの経緯をお話になった。講演後は、選手同士の早投やシュート実演、児童によるシュート体験を実施した。</p> <p>会場入口では、リオデジャネイロ五輪で使用したユニフォーム類を間近で自由に見られるように展示した。</p>



会場の様子



作戦会議

日時	平成29年1月26日(木) 9:30~11:20
事業名	石川県オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	石川県小松市立今江小学校
参加者	99名(5・6年生93名、教職員6名)
1. 室伏由佳(株式会社 attainment:陸上競技/ハンマー投、円盤投)	
2. 09:30~ 実技 講師紹介 実技 10:35~ 講演「可能性への挑戦 ~競技スポーツの経験を通して~」 室伏由佳 質疑・感想発表 児童代表挨拶	
3. 実技では、自己紹介ゲーム、じゃんけんゲーム、6人組での身体動かしを実施し、お互いを知らない児童同士でも積極的にペアをつくり楽しんだ。競争の要素も取り込みつつ、各ゲーム終了後はお互いの頑張りを認め合い、拍手で称え合った。「運動はみんなで気持ちを一つにしてやると、何倍も楽しくなる」とお話しになり、実技を終えた。 講演ではまずオリンピックの意義や価値について、自身の経験もふまえながらお話しになった。父親の影響で幼少期から海外の人や文化と触れあい、父親がオリンピックに出場している姿を見たことがきっかけで、オリンピックを目指すようになったと伝えた。上手いかない時は仲間に支えて貰い、諦めずに努力を続けることで結果がついてきたと伝え、アテネ五輪では予選落ちではあったがとても充実しており、それまでに努力してきたことが一番大事だと思ったと語った。最後に、「諦めない、決めつけない、思い込まない」という言葉を見童と一緒に声に出して読み、これらを大切にしたいと伝えた。	



実技・講演の様子

日時	平成29年1月26日(木) 13:55~14:40
事業名	石川県オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	石川県小松市立条南小学校
参加者	86名(5年生79名、教職員7名)
1. 室伏由佳(株式会社 attainment: 陸上競技/ハンマー投、円盤投)	
2. 13:55~ 実技 講師紹介 実技 質疑・感想発表	
3. 実技のはじめに、オリンピックの3つの価値についてお話しになった。卓越は一生懸命頑張ること、友情は仲間を大切にすること、敬意/尊重は感謝することと伝え、これらはオリンピックだけのものではなく日常生活にも当てはまるため、忘れないで大切にしてほしいと伝えた。 実技は、自己紹介ゲーム、身体を大きく使ったじゃんけん、じゃんけんをしながら走ってゴールを目指すゲーム、6人組での身体動かしを実施し、お互いを知らない児童同士でも積極的にペアをつくり楽しんだ。競争の要素も取り込みつつ、各ゲーム終了後はお互いの頑張りを認め合い、拍手で称え合った。「運動はみんなで気持ちを一つにしてやると、何倍も楽しくなる」とお話しになり、実技を終えた。	



実技の様子



感想発表

2. 高知県

(1) 学校の授業におけるオリンピック・パラリンピックの学び

オリンピック・パラリンピック大会や高知県スポーツに関することを学ぶことができる教材を活用した、「オリンピック・パラリンピアン等による理解啓発授業」を実施することとする進行計画に沿って進めた。

進行計画に基づき、授業を実施する4校（中学校1校、高等学校3校）を決定したが、中学校1校では講師候補の選出を行い交渉に入ったものの、講師との日程調整がつかず交渉を打ち切り、また他の講師では実施しないとの方針を確認し、事業の中止を決定した。高等学校3校では、学校側が2月中に実施可能な日程を確保することができなかつたため、事業の中止を決定した。

(2) 競技団体におけるオリンピック・パラリンピックの学び

各競技団体におけるオリンピック・パラリンピアン等による「オリンピック・パラリンピック啓発講義」や「スポーツ教室（スポーツクリニック）」を実施することとする進行計画に沿って進めた。

進行計画に基づき、6競技（陸上、バスケットボール、バレーボール、卓球、ラグビー、サッカー）を候補としたスポーツ教室（スポーツクリニック）を開催することとし、調整に入った。その後実施競技を3競技（ソフトボール、バドミントン、ラグビー）に縮小して実施する方向で進んだ。またラグビーでは、取り組み内容を「障害者スポーツ理解のための講義」として行うこととした。3競技での講師候補の選出を行い、日程調整と講師交渉に入ったが、交渉が成立しなかつたことから、事業の中止を決定した。

3. 長崎県

日時	平成28年12月13日(火) 9:55~10:45
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	瓊浦高等学校
参加者	688名(生徒655名、教職員30名、保護者3名)
1.	柳瀬彰良(白鵬女子高等学校教諭:水泳/水球) 志賀光明(株式会社登利平:水泳/水球) 飯田純士(東京ガスエスネット株式会社:水泳/水球) 福島丈貴(東京ガスライフバル保谷株式会社:水泳/水球)
2.	9:55~ 開会挨拶 対談 水球実技体験 質疑 生徒代表挨拶 閉会挨拶
3.	<p>水球という競技を知ってもらうためにも、水球男子日本代表チームが32年ぶりのオリンピック出場に至るまでの様子をまとめたDVDを上映した。上映後は、瓊浦高校教諭の方がインタビュアーを務め、インタビュー形式で対談を行った。今までにない戦術に変更したことについて感じたこと、水球を始めたきっかけ、オリンピックを目指したきっかけ等についてお話になった。スポーツとの接し方についての質問では、「スポーツは、技術を極めるだけでなく、人間を育てる一つの手段だと思う。挨拶がきちんと出来るなど、スポーツを通して人として成長出来るということが一番の大きな部分ではないかと思う」と、選手自身が大切にしている人間性の部分について生徒に伝えた。</p> <p>次に選手たちによる実演を実施した。選手たちは水球のルールを説明しながらパスを見せ、約30mの生徒たちの列の前後に立ち、その距離を片手でパスを行うなどの遠投も披露した。また、生徒に前に出てきてもらい、キーパーの選手相手のシュート体験などを行い、生徒に水球の魅力を伝えた。</p> <p>会場入口では、リオデジャネイロ五輪の公式スーツ、ガウン、水球帽等を間近で自由に見ることが出来るように展示した。</p>



会場と実技の様子

日時	平成 28年12月14日 (水) 14:20~15:20
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	長崎県立国見高等学校
参加者	297名 (生徒260名、教職員37名)
1.	柳瀬彰良 (白鵬女子高等学校教諭:水泳/水球) 志賀光明 (株式会社登利平:水泳/水球) 飯田純士 (東京ガスエスネット株式会社:水泳/水球) 福島丈貴 (東京ガスライフバル保谷株式会社:水泳/水球)
2.	14:20~ 開会挨拶 対談 水球実技体験 質疑応答 生徒代表挨拶 閉会挨拶
3.	生徒に水球という競技を知ってもらうために、水球男子日本代表チームが32年ぶりのオリンピック出場に至るまでの様子をまとめたDVDを上映した。上映後はリオ五輪事前合宿で行った海外での出来事や選手村の様子などについて、選手同士で対談した。また、オリンピックについても「オリンピックは勝つことではなく参加することに意味がある」というクーベルタンの言葉とともに、オリンピックの意義等を生徒に説明した。 次に選手たちによる実演を実施した。選手たちは水球のルールを説明しながらパスを見せ、約30mの生徒たちの列の前後に立ち、その距離を片手でパスを行うなどの遠投も披露した。また、水球のボールを順番に回し、生徒全員がボールに触れる機会を作った。その後、生徒に前に出てきてもらい選手とのパスやシュート体験などを行い、生徒に水球の魅力を伝えた。 質疑では、水球を始めたきっかけや試合中の選手同士のコミュニケーション方法、日常生活で心掛けていることなどの多くの質問がなされた。 会場入口では、リオデジャネイロ五輪の公式スーツ、ガウン、水球帽等を間近で自由に見ることが出来るように展示した。



対談と実技の様子

日時	平成28年12月16日(金) 9:55~10:45
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	長崎県立壱岐商業高等学校
参加者	307名(生徒、教職員、地域住民)
1.	柳瀬彰良(白鵬女子高等学校教諭:水泳/水球) 志賀光明(株式会社登利平:水泳/水球) 飯田純士(東京ガスエスネット株式会社:水泳/水球) 福島丈貴(東京ガスライフバル保谷株式会社:水泳/水球)
2.	9:55~ 開会挨拶 講演及び実演 生徒代表挨拶 閉会挨拶
3.	リオデジャネイロ大会で32年ぶりにオリンピック出場を果たした水球日本代表チームの4選手が登壇した。オリンピック理念を伝えるキーワードを盛り込んだ対談形式の講演では、選手の経験とオリンピック理念とを結びつけて紹介し、普段の生活の身近な場面からオリンピック理念を考える機会とした。さらに、水球ボールを使っの遠投やシュートなどの実演を通して、スピード感やスキルの正確さを伝えた。またリオデジャネイロ大会で使用したユニフォーム類を持参し、間近で自由に見ることが出来るように会場入口に展示した。質疑応答では活発に質問が出て、関心の高さがうかがえた。



会場の様子と生徒代表挨拶

日時	平成28年12月19日(月) 14:00~15:30
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	長崎南山高等学校
参加者	840名(生徒800名、教職員40名)
1.	副島正純(ウィルチェアアスリートクラブ ソシオ SOEJIMA:陸上競技/車いすマラソン)
2.	14:00~ 開会挨拶 講演「挑戦 ~今、私にできること~」 副島正純 質疑 生徒代表挨拶 閉会挨拶
3.	はじめに日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピック・パラリンピックそれぞれのシンボルマークの色や意味、パラリンピックの理念である「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ」という言葉を紹介した。また、パラリンピックの4つの価値(勇気、決断力、鼓舞、平等)は全ての人に通じるものと考えたとお話になり、オリンピック・パラリンピックでは勝つことよりも、勝つために努力することが大切であると伝えた。 次に、事故の瞬間に考えていたことや入院生活時の心境、車椅子競技に出会った時の喜び、パラリンピック出場に至るまでの経緯をお話になり、事故後は絶望しかなかったが、その状況を「諦める」ではなく「受け入れる」ことで新しい世界に挑戦しようと思ったと述べた。怪我をした当時には想像も出来なかった程、今、人生が楽しいと思えるのは、車椅子に「夢」「自信」「出会い」「存在価値」「居場所」を貰ったためと話し、自分の人生をどれだけ楽しむことが出来るかということに挑戦したいと思っていると伝えた。 最後に、「世界記録を出す」「2020年東京大会に出場してメダルを取る」という2つの目標と、「2020年東京大会で所属チームの全員がスタートラインに立つこと」という1つの夢を述べ、夢が叶うまで目標として持ち続けたいと思うと伝えた。



講演の様子

日時	平成29年1月24日（火）14:00～15:00
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	長崎県立大村工業高等学校
参加者	650名（生徒、教職員、保護者）
1.	田中理恵（日本体育大学児童スポーツ教育学部助教：体操/体操競技） 大海二郎（日本体育大学広報課）
2.	14:00～ 開会挨拶 講師紹介 対談「オリンピックとわたし～家族が支えてくれたもの～」 田中理恵、大海二郎 閉会挨拶
3.	講演会是对談形式で実施した。対談をしつつ生徒へ質問を投げかけ、返答を次の質問に繋げるといったキャッチボール形式の展開を取り入れ、ただ聞くだけではなく参加型の講演会となるように工夫した。生徒は呼びかけに対して返事をしたり、手を挙げて答えたり、質問をしたりと、主体的に参加する姿が見られた。オリンピックとして、また今年度からはオリンピックを支える立場としてオリンピックに関わってきた経験を話すことで、本事業として伝えたいオリンピック理念を扱う展開とした。



会場の様子



田中理恵氏

日時	平成29年1月24日（火）14：10～17：00
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	長崎県立五島高等学校
参加者	288名（生徒220名、教職員8名）
1. 海老原有希（スズキ浜松アスリートクラブ：陸上競技/やり投）	
2. 14：10～ 開会挨拶 講演「オリンピックへのチャレンジ」 海老原有希 質疑 生徒代表挨拶 閉会挨拶 16：00～ 部活動指導	
3. はじめに、オリンピック・パラリンピックについて日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピックの意義や価値、パラリンピックシンボル等について説明した。オリンピックやパラリンピックの価値は普段の生活の中にも当てはまることが多くあり、勝利することよりも目標に向かって全力で取り組み、努力を続けることが大切と伝えた。 その後はこれまでの経緯について、陸上を始めたきっかけ、日本一や世界大会、記録を目指す強い思い、リオオリンピックに至るまでの各年の出来事を詳細にお話になり、「どこにきっかけが転がっているかは分からないため、周りの人の意見に耳を傾け、どうしたら自分にプラスのものになるかを考えて、人との出会いを大切にしながらこれからを過ごして欲しい」と伝えた。また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、見に行きたい、何かしら携わりたいという思いを持って欲しいとお話になった。 部活指導では、ベンチプレスやクリーンなどのウエイトトレーニングを陸上部の投擲の生徒と一緒にいき、投擲向けのトレーニング方法を教えつつ交流した。	



講演と部活指導の様子

日時	平成29年1月25日（水）11：30～12：45
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの体験活動講座
会場	鶴鳴学園長崎女子高等学校
参加者	430名（生徒410名、教職員20名）
1. 海老原有希（スズキ浜松アスリートクラブ：陸上競技/やり投）	
2. 11：30～ 開会挨拶 講演「オリンピックへのチャレンジ」 海老原有希 質疑 生徒代表挨拶 閉会挨拶	
3. はじめにこれまでの経緯について、陸上を始めたきっかけ、日本一や世界大会、記録を目指す強い思い、リオオリンピックに至るまでの各年の出来事を詳細にお話になった。「ロンドンオリンピックが終わり、引退を考えた時期を経て2度目のオリンピックに挑戦してきたが、私にとってはすごくいい4年間だった。諦めずに次なる目標を高く持ち、それを一つずつ越えていくことを私は実践することが出来たので、この2回のオリンピックがあったと思う」と、諦めずに努力をすることの大切さを述べた。また、2020年に東京でオリンピックが開催されることに対して、見に行く人、ボランティアや運営に関わる人、選手やコーチとして出る人など、そういう人が一人でも多く出るとともに、何かしらの形でオリンピックに関わって欲しいと生徒に伝えた。 その後は、オリンピック・パラリンピックについて日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピック・パラリンピックのシンボルマークやオリンピックの意義等について説明した。勝利することよりも目標に向かって全力で取り組み、努力を続けることが大切だと伝え、これらはオリンピック・パラリンピックに限らず日常生活で生きていく上でも必要なこと、人として成長するときに必要なことだと思ってお話になり、これから人間として素晴らしい人になってくれることを期待していると生徒に伝えた。	



講演の様子

市民フォーラムの開催

本事業では、12月から2月にかけて計3回、競技団体関係者やスポーツ指導者、市民一般に向けたオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進フォーラムを開催した。実施内容は、「する」・「観る」・「支える（育てる）」の各視点を意識し、以下の3つの内容を通してオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの普及・推進に繋げることを目的として実施された。

- (1) オリンピアン・パラリンピアンによるオリンピック・パラリンピック大会の経験や競技人生に関する講話
- (2) 講師によるスポーツボランティアの役割等に関する解説
- (3) 指導者による競技者育成に関する講義

実施にあたっては、各県の教育委員会および体育協会、各種スポーツ団体、地元新聞社などのメディア、NPO法人、大学、障害者スポーツ協会などと連携しながら、イベント内容、講師、広報等の検討・実施を進めた。

<事業後アンケート>

どの事業においても「成果があった」と評価された。一方で、講師の決定から開催日までの期間が短く十分な周知ができずに予定より参加者を集められなかった、内容が充実していただけにもっと多くの参加者を募りたかったという意見が聞かれたことから、計画性のある事業実施の重要性が示された。

感想

- ・最先端のトレーニング理論を懇切丁寧に説明いただき、本県ジュニアアスリート指導者にとって大変有意義な講義であった。事業終了後に多くの指導者から「今後の指導の参考にしたい」「指導者として積極的に研修を深めていきたい」など大変好評であった。
- ・2020年東京大会に対する関心を高めるとともに、運動・スポーツの魅力や価値について多くの方に考えていただく機会になった。

以下に、各県において開催された市民フォーラムの概要について報告する。

1. 高知県

【1：講師 2：プログラム 3：内容】

日時	平成29年2月25日（土）13：45～16：15
事業名	スポーツセミナー
会場	高知県立高知追手前高等学校 芸術ホール
主催	高知県教育委員会 公益財団法人高知県体育協会
共催	日本体育大学
参加者	180名（競技団体関係者、一般）
1.	田中理恵（日本体育大学児童スポーツ教育学部助教：体操/体操競技） 大海二郎（日本体育大学広報課） 波多腰克晃（日本体育大学体育学部准教授） マセソン美季（日本財団パラリンピックサポートセンター：アイススレッジスピードレース）
2.	13：45～ 「スポーツセミナー」開会セレモニー 13：50～ 対談「スポーツの魅力」 田中理恵、大海二郎 14：35～ 講演①「スポーツの価値を高めるために」 波多腰克晃 15：30～ 講演②「スポーツから得たもの、スポーツを通して伝えたいこと」 マセソン美季 16：15～ 閉会
3.	全体テーマ：「スポーツの力」～スポーツの魅力や価値を考える～ ＜対談＞ 競技を始めたきっかけ、続ける中で指導者でもある両親がどんな育て方をしてくれたか、それがどう作用したかなど、指導者に向けたメッセージを伝えた。また自身が現在オリンピック・パラリンピックを支える立場として関わっていることから、東京都だけでなく日本全体で関わることの必要性を伝えた。 ＜講演①＞ スポーツの持つ「力」、スポーツをする人間の肉体が持つ「メディアとしての力」をどう扱いどう認識していくのか、過去のドイツの歴史からスポーツを利用した戦略に切り込み、気づかないうちに多勢に流されていくことへの危惧を伝えた。その上で、観る側、支える側、する側がスポーツの価値を高めるためにどうすることが必要かについて課題を示した。 ＜講演②＞ 自身のスポーツとの関わり、パラリンピアンとして経験したことやその後の経緯を伝え、その上でパラリンピック教育の意義や東京大会の位置づけ、現在の課題やその先に目指すもの等について、開発に関わったIPC公認教材の話題をまじえて伝えた。

2. 長崎県

日時	平成28年12月4日（日）9：50～12：00
事業名	平成28年度長崎県オリンピック・パラリンピック啓発事業 兼 平成28年度長崎県スポーツ指導者研修会
会場	長崎県川棚町総合文化センター
主催	公益財団法人日本体育協会 長崎県体育協会・長崎県スポーツ指導者協議会
共催	長崎県オリンピック・パラリンピック啓発実行委員会、日本体育大学
後援	長崎県教育委員会
特別協賛	大塚製薬株式会社
参加者	275名（日本体育協会公認スポーツ指導者）
1. 森長正樹（日本大学スポーツ科学部教授：陸上競技/走幅跳）	
2. 9：50～ 開校式 10：00～ 「国際大会を経験して ー陸上競技・走り幅跳びー」 森長正樹	
3. 走り幅跳びの日本記録保持者として、世界大会の記録だけを見ると一見日本人でも入賞やメダル獲得に届きそうではあるが、世界大会の多くは風の条件が悪い中で跳んでおり、海外の上位選手の自己記録は実際に跳んだ記録よりも2、30m多いことになると、日本の走り幅跳びの現状を紹介した。そういった世界との差を感じたことから、目標を入賞・メダル獲得から予選通過に変更し、目標達成に向けて自身の長短所の把握、大腿部のスイング強化等が必要であると考えたことを伝えた。その後、これらを向上させるためのトレーニングを実施し、特に大腿部スイング強化につながる体力面が強化出来たことで、トレーニングの記録が伸び、競技でも安定して記録が出るようになったと、目標達成のために必要なことを考え、行動することで、結果に繋がると述べた。また、競技の際の心構えとして、オリンピックや重要な大会では自己新記録が出るような気になってしまいがちだが、走り幅跳びで一步一步助走を数えながら跳ぶように、特別なことをせずに普段通りにやるのが記録に繋がるのだと、来場のスポーツ指導者にお話になった。	



講演の様子

日時	平成28年12月11日（日）9：50～15：30
事業名	ゴールデンエイジ特別強化対策事業 長崎県オリンピック・パラリンピック啓発事業 とびだせ世界へ！ながさきジュニアアスリート応援プロジェクト
会場	長崎県立大学シーボルト校
主催	長崎県教育委員会
共催	長崎県オリンピック・パラリンピック啓発実行委員会
後援	日本体育大学
参加者	203名（小学4～6年生113名、保護者68名、指導者22名）
1.	大東忠司（日本体育大学体育学部准教授：バドミントン） 岡田 隆（日本体育大学体育学部准教授）
2.	9：50～ 開校式 10：00～ オリンピアン講演会「オリンピックを経験して」 大東忠司 13：00～ 指導者・保護者プログラム「トレーニング理論・スポーツ障害」 岡田 隆 15：15～ 閉校式
3.	オリンピック講演会では、長崎県出身のオリンピックから、オリンピックでの経験談やオリンピック理念、目標を持ってスポーツを続けていくために必要なことを伝えた。 指導者・保護者プログラムでは、最新のトレーニング理論とスポーツ障害をテーマに、トレーニングの大原則、年齢に応じたトレーニングをする必要性（トレーニングの適時性）、運動・栄養・休養の重要性、スポーツ損傷の観点から柔軟性や筋力、動作をコントロールする能力を養うなど、日頃からの対策の重要性を伝えた。



大東忠司氏



指導者・保護者プログラムの様子

日時	平成29年2月20日（月）17：50～20：30
事業名	オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（スポーツ庁委託）＜市民フォーラム＞
会場	長崎大学文教スカイホール
主催	長崎大学、長崎県オリンピック・パラリンピック啓発実行委員会
共催	日本体育大学
参加者	100名（長崎大学生31名、長崎大学教職員23名、県内中学生16名、一般30名）
1. 杉本龍勇（法政大学経済学部教授：陸上競技/100m、400mリレー）	
2. 17：50～ 学生ディスカッション 18：30～ 開会挨拶 星野由雅（長崎大学理事） 18：40～ 講演「オリンピックから得たもの」 杉本龍勇 20：10～ 質疑 20：25～ 閉会挨拶	
3. 講演前に学生との交流を行い、トレーニング計画やピリオダイゼーション、チームの在り方、食事等について学生とディスカッション形式で対談した。 講演では、オリンピックを目指すプロセス、オリンピックの概念および意義と役割について紹介した。小学校6年生時に22歳の大学4年生時にオリンピックに出るという目標を決め、その目標達成のために、逆算して、今何をしなければいけないのかということを中心に考えて、練習はもちろん学業にも取り組んできたと述べた。オリンピックに出場して経験したのものとしてオリンピック精神を挙げ、金メダル獲得や100mを9秒台で走るという自身の目標を達成出来なかったことに対して後悔ばかりが募っている訳ではなく、そこから学んだことや、今指導者として生かされている部分も多くあると、勝つことが全てではなくその過程にも意味があると伝えた。「スポーツが単なる結果や競技成績だけではなく、むしろ全力でやることによってその後の人生に生きること、非常に大きな財産を得たのではないかと考えている」とお話になった。 講演後のアンケートでは、約95%が「大変良かった」または「良かった」と回答するなど、高評価を得た。	



ディスカッションの様子



杉本龍勇氏

✦ 教育現場における具体的な授業プログラムの作成

本事業では、12月に計13回、推進校を対象に、オリンピック・パラリンピアンによる「理解啓発・体験授業」を開催し、後日講演内容を活用した授業実践を行った。

「理解啓発・体験授業」は以下の3つの内容とし、後日講演内容を活用して、道徳、学活、体育等の授業でオリンピック・パラリンピック教育を実践した。オリンピック・パラリンピアンによる講話や体験のみで終わらせず事後の授業指導にも活用することで、児童生徒のオリンピック・パラリンピックへの興味や、オリンピック・パラリンピック精神等の理解を高めることを目的として実施された。

- (1) 大会の経験や競技人生に関する講話
- (2) オリンピック・パラリンピックの意義や価値、大会を取り巻く社会や大会を支えるしくみ等に関する講義
- (3) オリンピック・パラリンピック競技種目の体験講座

実施にあたっては、県の教育委員会、各種スポーツ団体、県出身のオリンピック・パラリンピアン、障害者スポーツ協会などと連携しながら進めた。

<事業後アンケート>

どの事業においても「成果があった」と評価された。一方で、事業の広報活動を今後の課題とする意見が多く聞かれ、早期の実施日程と講師の決定により、周知を図ることが課題に挙げられた。

感想

- ・障害があっても、夢や希望を持ち努力することの大切さを知り、障害者に対する子どもたちの意識の変容が見られた。また、講話を聞いて、道徳や学級活動などの学習に生かすことができた。
- ・あることを極めた人の話を聞くことにより、夢をかなえるために、できる目標を決めて、考えて行動に移すことの大切さを学ぶことができた。教師が教えるより、比べ物にならないくらい説得力があった。
- ・講演後の感想やふり返りから、競技に憧れをもち、自分の夢を絶対実現させたいという思いが強くなった児童が数多く見られた。

以下に、実施概要と実践内容について報告する。

1. 長崎県

【1：講師 2：プログラム 3：内容】

日時	平成28年12月6日(火) 14:00～15:00
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県島原市立第四小学校
参加者	270名(児童204名、教職員20、保護者46名)
1.	副島正純(ウィルチェアアスリートクラブ ソシオ SOEJIMA:陸上競技/車いすマラソン)
2.	14:00～ 開会挨拶 講演 副島正純 車椅子実技体験 質疑・感想発表 歌「ともだちになるために」 閉会挨拶
3.	まず日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピック精神やオリンピック・パラリンピックそれぞれのシンボルマークの色や意味について説明し、オリンピック・パラリンピックで勝つことも大事なことが、勝つことよりも出場するまでに努力することが大切であると児童に伝えた。また、リオデジャネイロパラリンピックで副島選手が出場したフルマラソンのレース展開についての詳しい説明とともに、2020年の東京大会に向けての決意を語った。さらに車いす生活になった経緯や、車いすスポーツに出会ってからの人生についてお話になり、人生を楽しむためにも夢を持って頑張ってもらいたいと児童に伝えた。 その後は、普段使用している車いすや競技用車いすについて、児童に実際に触れてもらいながらコミュニケーションをとり、その重さや値段、操作方法などを紹介した。児童の数名は副島選手のサポートのもと実際に競技用車いすに乗り、体育館一周を試走した。



講演と競技用車いす体験の様子

授業実践への展開：長崎県島原市立第四小学校

【6学年 学活（1時間）】

<学習のねらい>

パラリンピックで活躍された副島さんの強い生き方などに触れ、夢を持ち、目標を立てることによって、不撓不屈の心や自信などがわき上がることを学び、自分も実践していこうとする。

<学習の展開>

- ①将来の目標や夢について発表し合う。
- ②パラリンピアン副島さんの講話を聞いて、自分が感じた副島さんに対するイメージを発表し合う。
- ③副島さんと今の自分を比べて自分を振り返る。
- ④副島さんから学んだことを発表し合い、これからの自分について考える。

<感想や提案>

- ・今の自分と副島さんを比較させて自分を振り返らせたことにより、自分をじっくり見つめ直させることができた。
- ・授業の実施時間も6学年の今の時期（12月くらい）が適していると思う。



会場の様子

日時	平成 28年12月12日 (月) 13:55～14:55
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県長与町立長与第二中学校
参加者	529名 (生徒491名、教職員28名、保護者10名)
1.	中村礼子 (東京スイミングセンター：水泳/競泳)
2.	13:55～ 開会挨拶 講演「夢に向かって」 中村礼子 質疑 生徒代表挨拶 閉会挨拶
3.	はじめに中村氏が出場した北京五輪での背泳ぎ決勝の様子を上映し、コーチとの作戦や泳いでいる際の心境を交えて紹介した。また、日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピックの意義や価値等について説明した。 「ライバルの存在があるからこそ自分が強くなれる。仲間の支えや仲間の頑張っている姿を見て、自分も頑張ろうと思える」と仲間の大切さを伝え、多くの方々の支えがありオリンピックの場に立つ事が出来るため、そういった方々への敬意や感謝の気持ちが大事であるとお話しになった。競技において勝利することも大事であるが、人生のなかでは壁に直面する場面が多いため、壁を乗り越えるためにも努力する力を培って欲しいと伝えた。さらに、自分の夢を見つけるためには「チャレンジすること、継続すること、楽しいと思うこと、悔しいと思うこと」が大切だと話し、「絶対に夢を叶える」という強い気持ちを持って頑張ってもらいたいと伝えた。 質疑では、「挫折した時にどう乗り越えたか」という質問に対し、「競技を無理に続けるよりは一度練習を休み、また泳ぎたいと思うまで待った」と自身の経験を述べた。



講演の様子



アテネオリンピック、
北京オリンピックでの銅メダル

授業実践への展開：長崎県長与町立長与第二中学校

【2学年 道徳（1時間）】

<学習のねらい>

理想や目標をもつことが、日々の生活を充実させることにつながることに気付かせ、困難に屈せずねばり強く最後まで着実にやり抜く強い意志と態度を育てる。

<学習の展開>

- ①中村礼子さんの講演会で、印象に残っていることを発表する。
- ②中村礼子さん講演会の要旨を確認する。
- ③中村礼子さんが伝えたかったことは何か、考える。
 - ・夢（目標、理想等）を持つことの大切さ。
 - ・夢（目標、理想等）を達成するために努力すること。
 - ・自分の力を活かすこと。
 - ・努力することの大切さ。
 - ・感謝の気持ちを持つこと。
- ④私たちの道徳 P16「目標を目指してやり抜く強い意志を」を読む。
- ⑤私たちの道徳 P17 に目標を書き込む。
- ⑥私たちの道徳 P19「目標を実現するために取り組みたいこと」を考え、発表する。

<感想や提案>

- ・中村さんが伝えたかったことの確認は、グループで話し合わせると広がった。
- ・生徒は中村さんの講演をしっかりと聴いており、導入から興味を持って学習に取り組んだ。
- ・授業後半部は、グループでの協議、グループ毎の発表による学級全体での共有の形態をとった。互いの目標を確認する良い機会となった。

生徒感想

- ・目標や夢を持つことは大切
- ・目標や夢を成し遂げるためには具体的に行動することが必要
- ・今日決めたことを実行しようと思う、等

日時	平成28年12月13日(火) 13:45～14:35
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県西海市立大串小学校
参加者	98名(児童79名、教職員13名、保護者6名)
1.	柳瀬彰良(白鵬女子高等学校教諭:水泳/水球) 志賀光明(株式会社登利平:水泳/水球) 飯田純士(東京ガスエスネット株式会社:水泳/水球) 福島丈貴(東京ガスライフバル保谷株式会社:水泳/水球)
2.	13:45～ 開会挨拶 実技: ボールリレー 水球実技体験 質疑・感想発表 児童代表挨拶 閉会挨拶
3.	まずは、二人組で背中にボールを挟んだ状態でリレーを行うボールリレーを実施した。児童はチーム毎に選手からビブスを受け取り、選手主導の作戦会議後にボールリレーを開始した。全チームゴール後は、オリンピックの価値にある友情、敬意/尊重の精神のもと、順位に関係なく互いの頑張りを認め合い、努力を拍手で称えた。次に、選手同士の遠投やシュートを披露し、児童とのパスやシュート体験を実施した。パス体験では水球のルールに従い、全児童が選手と片手でパスを行い、交流を深めた。また、選手がキーパーを務めたシュート体験では、児童がゴールを決めるたびに歓声が上がった。 事前に選手のニックネームや趣味などをまとめた用紙を学校に配布していたため、子供達が選手に親しみを持って触れ合うことができた。また、会場入口ではリオデジャネイロ五輪の公式スーツやガウン、水着等の展示を行い、間近で自由に見ることができるようにした。



実技の様子

授業実践への展開：長崎県西海市立大串小学校

【2学年 体育（1時間）】

<学習のねらい>

いろいろなボールを投げたり、ついたり、取ったりしながら、ボールを使った動きに慣れ、的当てゲームやキャッチボールを楽しむことができる。

<学習の展開>

- ①準備運動を行う。
- ②ボールに慣れる動きを楽しむ。
- ③的当てゲームを楽しむ。

<感想や提案>

- ・選手にボールを正しく投げるコツやキャッチボールの楽しさを教わった。その時の感動を思い起こさせながら、ボール運動の楽しさを十分に味わわせたいと思い、この授業を作成。
- ・特に片手キャッチボールは、まさに取る人のことを思いやりながら、その人が取りやすい位置に投げることを心がけるため、その後の「的当てゲーム」に直接的につながる運動になった。
- ・的当てゲームに関しては、時間に制限を設け、その時間内で何点取れるかというルールで実施した（相手チームは、できるだけ素早くボールを拾い、相手チームに渡す）。しかし、投げる側は「もっと早く拾って欲しい」、拾う側は「精一杯やっている」という相互のすれ違いから、言い合いになる場面があった。それを回避するためには、制限時間を設けず、一人一人投げる時間を確保するという方法もあると思うが、時間がかかりすぎて間延びしてしまうとも感じた。

また、得点の計算については、実際のゲームの中で、習得したかけ算が生かされたことも実感し、算数の生活化につながるのではないかという期待をもった。



選手の間いかけに手を挙げて答える児童

日時	平成28年12月14日（水）13:45～15:35
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県佐世保市立清水中学校
参加者	309名（全校生徒、教職員）
<p>1. 鳥海連志（長崎県立大崎高等学校：車椅子バスケットボール） 佐世保 WBC メンバー7名</p>	
<p>2. 13:45～ 開会挨拶 講演 鳥海連志 ルール説明 エキシビジョンマッチ 車椅子バスケ体験 練習試合 質疑 閉会挨拶</p>	
<p>3. 清水中学校では、本年11月に鳥海選手を取り上げて道徳の学習を実施していた。今回はその延長線上に本事業を位置づけた。実施にあたっては、鳥海選手が所属する佐世保 WBC のチームメイトの協力を得て、競技用車椅子の確保・運搬・設置や、当日の進行・実技などを行った。鳥海選手の講演では、パラリンピック理念のキーワードを伝えた。実技を交えた指導では、ルール説明・佐世保 WBC によるエキシビジョンマッチのあと、生徒同士のチームに選手が一人サポートとして入る形で練習試合を行った。生徒は非常に積極的で参加希望者が多く、予定より多くの練習試合を行うこととなった。オーストラリアからの交換留学生数人も練習試合に参加し、楽しんでプレーに加わった。また、質疑応答では積極的に質問が出た。全体の進行を、生徒会役員3人が分担して担当した。</p>	



会場の様子



車椅子バスケの体験をするために
手を挙げてアピールする生徒たち

授業実践への展開：長崎県佐世保市立清水中学校

【2学年 学活（1時間）】

<学習のねらい>

目標を持つことの重要性、夢を実現するための努力の大切さについて考える

<学習の展開>

- ①車椅子バスケットボールのプレーを参観、体験しての感想を発表する。
- ②選手の自分の生活と練習の両立や過密なスケジュールについて学ぶ。
- ③過密なスケジュールの中で自分の目標を達成していくために必要なことを考える。
- ④自分の生活でやるべきことを考える。
- ⑤選手のみなさんへ今の思いや講演のお礼の気持ちを伝える。

<感想や提案>

- ・事前の打合せが必要。
- ・啓発事業の流れと校内の取組方針の確認の徹底を行う。



車椅子バスケット体験

日時	平成28年12月14日(水) 10:50~12:05
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県雲仙市立川床小学校
参加者	62名(児童39名、教職員11名、保護者12名)
1.	村田由香里(日本体育大学保健医療学部助教:体操/新体操) 日本体育大学新体操部部員4名
2.	10:50~ 開会挨拶 実技 講話 村田由香里 実演 日本体育大学新体操部員 児童代表挨拶 閉会挨拶
3.	はじめに、村田選手自身が様々な習い事をしてきた中で新体操を続けようと思った経緯をお話になり、できないと感じるということはまだ伸びしろがあるということなので立ち止まらずに頑張ってもらいたいと児童に伝え、実技に移った。軽く身体を動かした後に柔軟体操を行い、新体操で使用するリボン等の手具を実演と体験を交えながら説明し、児童と交流した。 実技後は自身の経験を踏まえてオリンピックについて紹介し、オリンピックの価値に触れ、どんな時もベストを尽くす事、悔しいと思わせてくれる仲間を大切にすることの大事さを伝えた。村田選手の経験上、このようなことが出来る人は、いざという時に必ず誰かが助けてくれるとお話になり、周りの人に感謝する気持ちを忘れずに色々なことが出来る人になって欲しいと伝えた。 最後は日本体育大学新体操部学生によるリボンの演技を披露した。児童は間近で披露される演技に見とれ、演技後には大きな拍手を送った。



オリンピックの意義について
説明する村田氏



ロープをくぐる児童

授業実践への展開：長崎県雲仙市立川床小学校

【5・6学年 道徳（1時間）】

<学習のねらい>

オリンピックの講話や交流を通して、自分の生活を振り返り、目標を持ち困難にくじけず、最後まで粘り強くやり遂げようとする意欲を高める。

<学習の展開>

- ①自分が今、頑張っていることについて発表する。
- ②日本体育大学の村田先生と学習したことを振り返る。
- ③村田先生が練習を一度も休まなかった理由について考える。
- ④目標を達成するためには、どうすればいいのかについて考える。
- ⑤今日の学習を振り返りながら村田先生へ手紙を書く。

<感想や提案>

- ・講話の中にあつた「練習を一度も休まなかった」という言葉を焦点化し、その理由を問うことで、「目標をもつこと」や「最後まで諦めず取り組むこと」等の価値の理解につなげることができた。
- ・展開後半に村田先生へ宛てた手紙を書かせる取り組みを入れた。交流活動へのお礼や感想だけではなく、児童は自己を見つめながら、今後の自分の生き方まで意識を広げ、深く考えさせることができた。
- ・オリンピックとの直接的な体験活動と授業を連携させたことで、児童は交流活動や講話をもとに、「希望と勇気、努力と強い意志」に関する価値について深く考え、自分の課題解決に取り組むことができた。



全身を使ってジャンケンをする児童

日時	平成28年12月15日(木) 10:00~12:00
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県長崎市立香焼小学校
参加者	270名(児童180名、中学生40名、教職員・保護者・地域住民50名)
<p>1. 大東忠司(日本体育大学体育学部准教授:バドミントン) 日本体育大学バドミントン部部員2名</p>	
<p>2. 10:00~ 開会挨拶 講話「オリンピック理念について」 大東忠司 実技体験 講話「夢に向かって」 大東忠司 閉会挨拶</p>	
<p>3. 長崎県出身のオリンピックによる実技を交えた体験授業として、オリンピック理念についての講話、実技を交えた体験授業、講話「夢に向かって」という構成で実施した。実技を交えた体験授業では、日本体育大学バドミントン部の2名が実演に協力した。ルール説明、ショットの種類、ゲームの構成など、実演と解説でわかりやすく説明が進み、子どもたちは関心を持って話を聞いていた。香焼小学校バドミントン部部員10人程度が交代で大学生と打ち合い、それを周りから見学するという形態で進めた。周りで見ている児童がバドミントン部部員を応援するなど、体験と見学がうまくマッチして、全員参加で授業が進んだ。またオリンピックと大学生との打ち合いを見ることで、生の迫力やスピード感を伝えた。実技の後「夢に向かって」のお話により、考えさせる構成となったことでより印象に残る内容となった。</p>	



会場の様子



児童と円陣を組む大東氏

授業実践への展開：長崎県長崎市立香焼小学校

【2学年 道徳（1時間）】

<学習のねらい>

元バドミントン競技オリンピック代表選手「大東忠司」先生のお話を聞き、また、実技を見て、スポーツ選手が努力を積み重ね、一つのを追い求めるスポーツの素晴らしさを知り、児童がより高い目標を立て、自分としての夢や希望を掲げ、志や勇気をもって、よりよい自己を実現しようとする向上心を育てる。また、自分の夢や努力していることなどについて話し合い、自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかり行うことが大切であることを理解し、がんばる自分に気付くことができるようにする。（一部改正学習指導要領内容 A 主として自分自身に関すること<小学校低学年>個性の伸長）

<学習の展開>

- ①元オリンピック日本代表選手「大東忠司先生」に関心をもつ。
- ②夢に向かって、夢を実現するために大切なことについて話し合い、自分の夢について考える。
- ③今、自分が努力していることやこれから努力したいことは何かを話し合う。
- ④自分の夢を持ち、実現するには、どんなことが大切であるか自分の考えをまとめる。

<感想や提案>

大東忠司さんの講演の翌日に2年生の道徳教材として「夢を実現するために」の道徳授業を行った。子供たちは、大東さんの話をしっかり覚え、夢を持ち、目標に向かって努力することが大切であることを理解することができた。また、自分の夢としてサッカーやバドミントン、バスケットボール、空手、水泳、テニス、野球など自分が体験したスポーツ、ドッジボールを夢や目標に挙げた子供が多かった。また、漫画や絵を描くことなど得意なことにも目を向けるようになった。自分のポジションを守ることやスタミナをつけること、あきらめないうで続けることが大切であると意欲的な考えでまとめることができた。

日時	平成28年12月15日(木) 14:15~15:45
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県長崎市立南陽小学校
参加者	363名(児童331名、教職員・保護者32名)
1.	大東忠司(日本体育大学体育学部准教授:バドミントン) 日本体育大学バドミントン部部員2名
2.	14:15~ 開会挨拶 講話「オリンピック理念について」 大東忠司 実技体験 講話「夢に向かって」 大東忠司 閉会挨拶
3.	長崎県出身のオリンピックによる実技を交えた体験授業として、オリンピック理念についての講話、実技を交えた体験授業、講話「夢に向かって」という構成で実施した。実技を交えた体験授業では、日本体育大学バドミントン部の2名が実演に協力した。同日午前中に事業を実施した香焼小学校から、当日使用したバドミントン競技を紹介するパワーポイントが前もって共有されており、小学校間での協力体制が整っていた。ルール説明、ショットの種類、ゲームの構成など、実演と解説でわかりやすく説明が進み、子どもたちは関心を持って話を聞いていた。南陽小学校バドミントン部部員3人や校長先生他教員数名が交代で大学生と打ち合い、それを周りから見学する場面では、全員でバドミントン部部員を応援するなど、体験と見学がうまくかみ合っており、一体感を持って授業が進んだ。また、オリンピックと大学生との打ち合いを見ることで、生の迫力やスピード感を伝えた。実技の後、「夢に向かって」の講話では真剣に聞く姿勢が見られた。



授業の様子

授業実践への展開：長崎県長崎市立南陽小学校

【6学年 道徳（1時間）】

<学習のねらい>

夢や希望をもち、自分のよさを積極的に伸ばしていこうとする態度を育てる。

<学習の展開>

- ①自分の特徴について考え、発表する。
- ②資料を読んで話し合う。
- ③自分のよさをどう生かしていくか考え、友達と交流する。

<感想や提案>

自分のよさを知り、しっかりとした自尊感情を確立することで、夢を追う力を獲得することができる考えた。本学級では、毎日の帰りの会で、「今日は〇〇さんのよさを紹介しましょう」と呼びかけ、友達のよさを伝える場を設定している。そのため、自信をもって自分のよさを発表できる雰囲気ができている。今回の授業では、オリンピック講演会でのお話をふまえたうえで資料を選んだ。3学期の目標を立てさせたところ、「自分の夢を見つけたい」という児童もいた。この授業だけにとどまらず、継続して指導することで、確かな自尊感情を育てていきたいと考えている。



バドミントン体験

日時	平成28年12月19日(月) 10:50~12:10
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県長崎市立横尾中学校
参加者	200名(生徒180名、教職員17名、保護者3名)
1.	副島正純(ウィルチェアアスリートクラブ ソシオ SOEJIMA:陸上競技/車いすマラソン)
2.	10:50~ 開会挨拶 講演「挑戦 ~今、私にできること~」 副島正純 競技用車いす体験 生徒代表挨拶 閉会挨拶
3.	はじめに日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピック・パラリンピックそれぞれのシンボルマークの色や意味、パラリンピックの理念である「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ」という言葉を紹介した。また、パラリンピックの4つの価値(勇気、決断力、鼓舞、平等)は全ての人に通じるものと考えたとお話になり、オリンピック・パラリンピックでは勝つことよりも、勝つために努力することが大切であると伝えた。 次に、事故の瞬間に考えていたことや入院生活時の心境、車椅子競技に出会った時の喜び、パラリンピック出場に至るまでの経緯をお話になり、事故後は絶望しかなかったが、その状況を「諦める」ではなく「受け入れる」ことで新しい世界に挑戦しようと思ったと述べた。怪我をした当時には想像も出来なかった程、今、人生が楽しいと思えるのは、車椅子に「夢」「自信」「出会い」を貰ったためだと話し、自分の人生をどれだけ楽しむことができるかということに挑戦したいと思っていると、“今、私にできること”を伝えた。 講演後は、普段使用している車いすや競技用車いすについて、児童に実際に触れてもらいながらコミュニケーションをとり、その重さや値段、操作方法などを紹介した。児童の数名は副島選手のサポートのもと実際に競技用車いすに乗り、体育館一周を試走した。



講演の様子

授業実践への展開：長崎県長崎市立横尾中学校

【1学年 道徳（1時間）】

<学習のねらい>

パラリンピックについて理解し、その意義を知ろう。

<学習の展開>

- ①「副島選手」について、講演で学んだことを振り返る。
 - ・どのような人か？
 - ・何をした人か？ 等を確認する。
- ②オリンピックとパラリンピックの共通点、相違点について班で話し合い、意見を発表する。
- ③パラリンピックの意義について班で考え、意見を交換し、考えを深める。
- ④副島選手の講演会でのメッセージを振り返り、副島選手にとってパラリンピックはどのような意味があったのかを考える。
- ⑤オリンピック・パラリンピックに参加することの意義について教師の話聞く。
- ⑥振り返り用紙に授業の感想を書く。

<感想や提案>

- ・副島選手の講演会が生徒たちにとって印象深いものだったようで、「その言葉に勇気もらった」という生徒や、「生き方に感銘を受け、励まされた」という生徒が多くいたことが、生徒の感想の中に見られた。大変、有意義であった。
- ・中学1年生を対象に授業を行ったが、パラリンピックはもちろん、オリンピックの意義についてもあまり知らない生徒がおり、事前準備や啓発が必要だと感じた。
- ・感想を読むとオリンピック・パラリンピックに興味を示しその意義に共感した生徒が多く、こうした機会を持つことで、2020年東京大会への理解も深まり、意味あるものになると感じた。



競技用車いす体験

日時	平成28年12月20日(火) 13:30~15:00
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県立盲学校
参加者	70名(児童生徒、職員、保護者)
1.	信澤用秀(障がい者スポーツ選手雇用センター シーズアスリート:ゴールボール) 増田 徹(日本ゴールボール協会理事)
2.	13:30~ 開会挨拶 講演 信澤用秀 ゴールボール実技体験、練習試合 閉会挨拶
3.	本盲学校は、小学校から高校さらには専攻科が設置されており、日頃から授業でゴールボールを行っていたためゴールやコートなど設備も整っており、児童生徒の競技への関心も高かった。選手のお話の中にオリンピック理念のキーワードを盛り込み、選手の親しみやすい経験からオリンピック・パラリンピックについてとらえる機会とした。実技を交えた体験授業では、選手と生徒たちの対戦や2チームに分かれての練習試合を行い、ハイレベルな技術やスピードを直接体感する機会とした。進行や審判、解説などを、国際審判員の資格を持つ競技団体関係者が担当したことで理解が深まった。



会場の様子



信澤氏の筋肉に驚く児童たち

授業実践への展開：長崎県立盲学校

体育の授業でゴールボールを行う際に、今回の授業での経験を生かして練習方法や試合の展開に新しいエッセンスを取り入れることが可能となる。また、選手の講話にあった「新しいことにチャレンジする」という考え方を、教科を超えて生活の中に取り入れる視点を持つことで、今回の授業をより有意義なものとして活用することが可能となる。



ゴールボール体験

日時	平成28年12月20日(火) 11:10～11:55
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県五島市立緑丘小学校
参加者	530名(児童499名、教職員20名、保護者11名)
1.	中田大輔(株式会社エアリアルドリーム:体操/トランポリン) 瀬谷真一(株式会社エアリアルドリーム)
2.	11:10～ 開会挨拶 講話・実演 トランポリン体験 閉会挨拶
3.	はじめに日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピック・シンボルやオリンピズム等について説明した。オリンピック価値の卓越はベストを尽くして一生懸命頑張ること、友情は協力や助け合い、敬意/尊重は感謝することと紹介し、勝つことも大事だが、目標に向かって頑張るための努力を大切にしてほしいと伝えた。また、夢の達成のためには毎日の積み重ねが大事だと伝え、「どんなに高い壁でも1日1cm ずつ登って行くとそのうち頂点に辿り着き、壁を乗り越えた時にはじめて、壁の向こうの新しい世界を見ることが出来る。そうやっていくつもの壁を乗り越えて行くことで、きっと夢も目標も達成出来ると思う」とお話になった。さらに2020年の東京オリンピックに向けて、日本でオリンピックが開催されることは人生で一度あるかないかの出来事のため、どんな形でもいいので関わってほしいと伝えた。 その後の実演では、トランポリン上での縄跳びや着替え、壁走り、試合同様の演技などを披露され、中田選手が跳ぶたびに大きな歓声と拍手が起こった。また、トランポリン体験を数名の児童と教員を対象に実施し、真っ直ぐ上に跳ぶストレートジャンプを10回体験した。簡単そうに見えて難しく、途中でバランスを崩してお尻をつく児童が多くみられたが、楽しく体験していた。



オリンピックについて説明する中田氏

授業実践への展開：長崎県五島市立緑丘小学校

【6学年 体育（1時間）】

<学習のねらい>

元オリンピック選手によるトランポリン演技及び講演を通して、トランポリン競技に興味をもつとともに、学習したことを実際に体感することで、オリンピックを更に身近に感じ、東京オリンピックへの関心を高める。

<学習の展開>

- ①オリンピック・パラリンピック事業での中田選手の技を振り返る。
- ②手の動かし方、体を真っ直ぐにすることを床で練習する。
- ③一人用トランポリンで、ストレートジャンプにチャレンジする。
- ④感想を発表する。
- ⑤中田選手の言った、「続けることが大切」という言葉について考える。
- ⑥東京オリンピックへの期待をもつ。

<感想や提案>

- ・トランポリンという競技は、普段児童が経験できないものなので、経験させるよいきっかけとなった。
- ・オリンピック・パラリンピック事業の前に、トランポリンや中田選手についての事前授業をしていたら、更に効果的だった。



トランポリン体験

日時	平成28年12月20日(火) 14:00~15:00
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県五島市立岐宿小学校
参加者	112名(児童49名、教職員13名、保護者・地域住民50名)
1.	中田大輔(株式会社エアリアルドリーム:体操/トランポリン) 瀬谷真一(株式会社エアリアルドリーム)
2.	14:00~ 開会挨拶 講話・実演 トランポリン体験 閉会挨拶
3.	はじめに日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピズム等について説明した。オリンピック価値の卓越はベストを尽くして一生懸命頑張ること、友情は協力や助け合い、敬意/尊重は感謝することと紹介し、日々色々なことに感謝し、たくさんの人に思いやりを持って接することが大事だと思ふと伝えた。また、夢の達成のためには毎日の積み重ねが大事だとお話になり、難しいことにも挑戦して諦めない気持ちを大切にしてほしいと伝えた。さらに、2020年の東京オリンピックに向けて、日本でオリンピックが開催されることはとても貴重なため何らかの形で参加してほしいと伝えた。 その後はトランポリン競技について、オリンピック出場枠は世界で男女各16名のため数あるオリンピック競技の中でも一番出場が難しいと言われていたり、採点基準などを紹介し、トランポリン上での縄跳びや着替え、試合同様の演技などを披露した。また、トランポリン体験を全児童と教員数名を対象に実施し、バランスを崩しながらも楽しくチャレンジする姿が見られた。



会場の様子

授業実践への展開：長崎県五島市立岐宿小学校

【6学年 道徳（1時間）】

<学習のねらい>

より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力しようとする態度を育てる。

<学習の展開>

- ①中田大輔さんが、何を伝えたかったのか考える。
- ②本時のめあてを確認する。
- ③中田さんのお話をふり返る。
- ④「私たちの道徳」P.21の「私が学びたい人物」に中田大輔さんのことを記入する。
- ⑤自分の夢を語る。

<感想や提案>

- ・今回は、道徳の「希望・努力」の価値で授業を行ったが、「国際理解」「感謝」「友情」等、いろいろな価値での道徳授業や特別活動が実施できると感じた。
- ・子どもたちの感動体験が子どもたちの心を揺り動かすということを、授業を通して実感した。講話や体験だけで終わらせるのではなく、事後の指導に生かすことが大変有効であると分かった。
- ・プレゼンの資料を入手することは難しいと思うので、カメラで各ページを撮影しておくことで授業がしやすいと思う。



トランポリン体験



児童と交流する中田氏

日時	平成28年12月21日(水) 9:30~10:20
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県長崎市立為石小学校
参加者	187名(児童120名、教職員13名、保護者・地域・園児54名)
1.	中田大輔(株式会社エアリアルドリーム:体操/トランポリン) 瀬谷真一(株式会社エアリアルドリーム)
2.	9:30~ 開会挨拶 講話・実演 トランポリン体験 児童代表挨拶 閉会挨拶
3.	はじめに日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピック・シンボル、オリンピズム等について説明した。オリンピック価値の卓越はベストを尽くして一生懸命頑張ること、友情は協力や助け合い、敬意/尊重は感謝することと紹介し、勝つことも大事だが、目標に向かって頑張るための努力を大切にしてほしいと伝えた。また、夢の達成のためには毎日の積み重ねが大事だと伝え、「どんなに高い壁でも1日1cm ずつ登って行くとそのうち頂点に辿り着き、壁を乗り越えた時にはじめて、壁の向こうの新しい世界を見ることが出来る。そうやっていくつもの壁を乗り越えて行くことで、きっと夢も目標も達成出来ると思う」とお話になった。さらに2020年の東京オリンピックに向けて、何かしらの形で参加し、オリンピックを盛り上げて欲しいと伝えた。 その後はトランポリン競技についてルール等を紹介し、トランポリン上でのバランスボールを使用したドリブルや宙返り、試合同様の演技等を披露した。また、トランポリン体験を数名の児童と教員を対象に実施し、バランスを崩しながらも楽しくチャレンジする姿が見られた。



講演の様子

授業実践への展開：長崎県長崎市立為石小学校

【5学年 道徳（1時間）】

<学習の展開>

- ①自分の夢について考える。
- ②中田大輔さんの話を聞いたり、演技を見たりする。
- ③講師の話を聞いて感想を書く。

<感想や提案>

国語の学習で伝記について学び、偉人の伝記を読み深め、その人の生き様から様々なことを学びとった。今回直接話を聞かせていただき、子どもたちの心に響いていたのが感想から見て分かった。オリンピックはテレビで見た子がほとんどで身近に感じていたとは思いますが、今回目の前で競技種目を見せていただき、さらに興味がわいてきたと思う。オリンピックのマークのもつ意味も知らなかった子どもが多く、納得していた。



トランポリン体験

日時	平成28年12月21日(水) 14:05~14:50
事業名	オリンピック・パラリンピアンとの交流・体験後の授業プログラム作成
会場	長崎県長崎市立福田小学校
参加者	483名(児童424名、教職員29名、保護者30名)
1.	中田大輔(株式会社エアリアルドリーム:体操/トランポリン) 瀬谷真一(株式会社エアリアルドリーム)
2.	14:05~ 開会挨拶 講話・実演 トランポリン体験 児童代表挨拶 閉会挨拶
3.	はじめに日本体育大学が用意したスライド資料を用いて、オリンピック・シンボル、オリンピズム等について説明した。オリンピック価値の卓越はベストを尽くして一生懸命頑張ること、友情は協力や助け合い、敬意/尊重は感謝することと紹介し、勝つことも大事だが、目標に向かって頑張るための努力を大切にしてほしいと伝えた。また、夢の達成のためには毎日の積み重ねが大事だと伝え、「どんなに高い壁でも1日1cm ずつ登って行くとそのうち頂点に辿り着き、壁を乗り越えた時にはじめて、壁の向こうの新しい世界を見ることが出来る。そうやっていくつもの壁を乗り越えて行くことで、きっと夢も目標も達成出来ると思う」とお話になった。さらに、2020年の東京オリンピックに向けて、何かしらの形で参加し、オリンピックを盛り上げて欲しいと伝えた。 その後はトランポリン競技のルールを紹介し、トランポリン上でのバランスボールを使用したドリブルや宙返り、試合同様の演技等を披露した。また、トランポリン体験を数名の児童と教員を対象に実施し、バランスを崩しながらも楽しくチャレンジする姿が見られた。



講演の様子

授業実践への展開：長崎県長崎市立福田小学校

【4学年 学活（1時間）】

<学習のねらい>

中田大輔選手の講演会から、オリンピックとはどんな大会か興味をもつ。また、オリンピック・パラリンピッククイズを解きながら、オリンピックやパラリンピックについての見識を深めたり、興味や関心を高めたりすることで、東京大会では何らかの形で関わっていきたいという気持ちを育む。

<学習の展開>

- ①中田大輔選手の講演会をふり返る。
- ②学習課題をつかむ。
- ③オリンピックについて知っていることを話し合う。
- ④オリンピック・パラリンピッククイズを解く。
- ⑤授業のふり返りをする。

<感想や提案>

- ・メディアで取り上げられている競技については子どもたちもよく知っているが、他にもいろいろな競技があることや世界中からたくさんの選手が集まることにとっても驚いていた。今回の中田選手のトランポリン競技のように、いろいろな競技で活躍している人を紹介する機会が増えるとオリンピック・パラリンピックの啓発推進につながると感じた。
- ・オリンピックをはじめとする様々なスポーツはもちろん選手が主役だが、選手が活躍するために多くの人がサポートしていることに子どもたちは気付くことができた。一流選手になれるように頑張ることも素晴らしいが、ボランティアとして参加をしたり、現地やテレビで応援したりすることもスポーツに関わる重要な役割なのでいろいろな関わり方をしてほしいと思う。



中田氏に楽しかったかどうかと聞かれ、手を挙げる児童たち

✚ 教員向けワークショップの開催

本事業では、教員を対象に、日本体育大学に蓄積されたオリンピック・パラリンピックに関する知識をもとに、学校現場での授業づくりに向けたセミナーを開催した。セミナーは、教材を活用した教育の内容・方法について実践例を紹介し、情報共有を目的として実施された。

<事業後アンケート>

両事業とも「成果があった」と評価された。一方で、より授業に活用できる内容を盛り込んでほしいとの意見も出たため、授業の単元に即した内容をさらに組み込むことが今後の課題となる。

感想

- ・オリンピック・パラリンピック教育と授業実践に絡めた貴重な講義を受け、今後の授業実践に大いに役に立つ情報をたくさん得ることができた。

以下に、開催概要を報告する。

1. 長崎県

【1：講師 2：プログラム 3：内容】

日時	平成28年11月11日（金）13：15～14：45
事業名	平成28年度「性に関する教育研修会～指導者養成に向けて～（対馬地区）」並びに アンチ・ドーピング研修会（長崎県オリンピック・パラリンピック啓発事業）
会場	対馬市美津島ふれあいプラザ
主催	長崎県教育委員会 長崎県こども政策局
共催	日本体育大学
参加者	27名（小中高等学校および特別支援学校の教職員、学校医、市町教育委員会担当者、県・市町の保健師、母子保健関係職員等）
1.	依田充代（日本体育大学体育学部教授）
2.	13：15～ オリンピック・パラリンピック教育 講演「アンチ・ドーピング」 依田充代
3.	この研修会は、学校の教育現場におけるアンチ・ドーピングに対する正しい知識を身につけ、子どもたちが健全なスポーツ活動を実践していけるよう開催された。ドーピングの定義、なぜドーピングが行われるのか、ドーピングの実態、ドーピングをめぐる様々な考え方について、映像をまじえて現在の状況を伝えた。また、禁止薬物と市販薬、学校教育の場で知っておきたいことなど、普段の生活の中にある着眼点について情報を提供した。

日時	平成29年2月13日（月）14:00～15:30
事業名	平成28年度第4回五島市教育研究会保健体育部会
会場	長崎県五島市立緑丘小学校
参加者	29名（五島市教育委員会・教員23名、五島高等学校生徒6名）
1. 白旗和也（日本体育大学体育学部教授）	
2. 14:00～ 開会挨拶 14:10～ 講話「オリンピック・パラリンピック啓発推進へ向けた授業実践について－東京都の実践校を参考に－」 白旗和也 15:10～ 質疑 15:25～ 閉会挨拶	
3. オリンピック・パラリンピック教育について、“教材”としてどのように活用するかという旨をお話になった。小学校では「ルールやマナーを遵守することの大切さ」「スポーツの意義や価値等に触れる」ことができるよう指導等の在り方について改善を図り、中学校・高等学校では「オリンピック・パラリンピックの意義や価値、ドーピング等」の内容について改善を図るといような次期学習指導要領について触れ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたアクティブ・ラーニング等についても伝えた。また、教材・教具を活用した授業実践例や、東京都お茶の水小学校での授業実践例を紹介しながらも、離島という場所柄、「その地域だからこそ出来ることを考えていただき、日本人の子供だからこうしたいという願いを持って進めていただくとありがたい」と、今後のオリンピック・パラリンピック教育の進め方について伝えた。	



講演の様子

その他の取り組み

1. 研究授業・セミナーへの参加

(1) 東京都千代田区立お茶の水幼稚園・小学校研究授業への参加

これからオリンピック・パラリンピック教育を展開していく上で先行例を実際に見ることが大切であるとの認識から、3県の教育委員会から参加者を募り、公開授業と講演会への参加を支援した。3県から教職員合計13名が参加し、東京都におけるオリンピック・パラリンピック教育について知る機会とした。

日時：平成29年1月16日（月）13：30～15：30

会場：東京都千代田区立お茶の水幼稚園・小学校

研究主題：「21世紀をたくましく生きぬく子どもの育成—オリンピック・パラリンピック教育を通して—」

東京都千代田区立お茶の水幼稚園・小学校は、平成27年度東京都教育委員会オリンピック・パラリンピック教育推進校研究開発校、平成28年度東京都教育委員会オリンピック・パラリンピック教育重点校として、東京都の中でも先進的なオリンピック・パラリンピック教育を行ってきている。特にカリキュラム・マネジメントについての知見が深いことから、今後の事業推進に有益な機会となった。

(2) パナソニック主催「Teachers' セミナースペシャル」への参加

オリンピック・パラリンピック教育推進のヒントを得るため、パナソニックがオリンピック・パラリンピックを題材にして開発・提供している教育プログラムへの参加を支援した。1県から1名を派遣して、アクティブ・ラーニングを取り入れたセミナー（1部、第2部、第3部）を受講し、参加者参加型のプログラムを体験する機会とした。

日時：平成29年1月20日（金）13：30～17：00

会場：パナソニックセンター東京 ホール

第1部＜パラリンピックをテーマに「多様性と共生社会」について考える 授業体験ワークショップ＞

第2部＜バリアバリューから社会を変える ～皆が求めるユニバーサルマナー～＞

第3部＜オリンピックとパラリンピックをテーマにした次世代教育の事例紹介＞

2. ポスター作成／ラッピングバス／デジタルサイネージ

長崎県において、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックへ向けて県内から気運を高めることをねらいとして、推進校から募集したポスター図案を使用し、ラッピングバス、デジタルサイネージ、県の広報誌や新聞等で県内に広く紹介し、啓発活動を実施した。以下に、その概要を報告する。

(1) ポスター作成

推進校4校（高等学校4校）から、各学校1点のポスター原画を募集した。ポスターのテーマは、組織委員会のポスター募集にあった「リオオリンピック・パラリンピック大会で心に残ったこと」「東京大会に期待すること」とした。

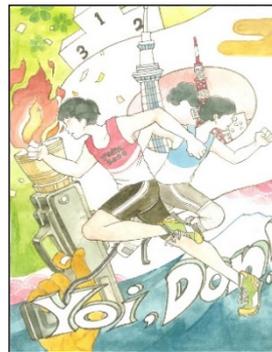
提出された4点の中から1点を、長崎県オリンピック・パラリンピック啓発実行委員会で選出し、A1ポスターとして県内学校や県の施設等へ配布・掲示した。また、推進校から提出された4点は、ラッピングバスのデザイン、デジタルサイネージの1ページとして使用した。



純心女子高等学校
3年 荒木もえ子さん



創成館高等学校
3年 池松真弥さん



長崎日大高等学校
3年 萬歳千聖さん



活水高等学校
美術部のみなさん

(2) ラッピングバス

推進校4校から提出されたポスター原画ごとに1台、計4台のラッピングバスを作成した。県内の路線を巡回する長崎県営バスを使用し、広く市民に向けた啓発活動とした。

(3) デジタルサイネージ

推進校4校から提出されたポスター原画ごとに1ページ、計4ページをデジタルサイネージの冒頭ページに使用した。以降のページでは、長崎県出身オリンピック・パラリンピアンとの紹介と、長崎県の事業推進に協力をいただいているオリンピック・パラリンピアンとの紹介ページとした。県立体育館等のスポーツ施設6箇所に設置し、施設利用者へ向けた啓発活動とした。

🌈 シンポジウムの開催

本事業では、本年度の事業取り組みについての成果発信のためのシンポジウムを開催した。シンポジウムは、「オリンピック・パラリンピックから学ぶものー世界へ繋げる希望と平和ー」というテーマで開催し、各県の事業実施事例の共有を目的として実施された。以下に、開催概要を報告する。

【1：講師 2：プログラム 3：内容】

日時	平成29年3月11日（土）13：30～16：00
事業名	オリンピック・パラリンピックから学ぶものー世界へ繋げる希望と平和ー
会場	日本体育大学
主催	日本体育大学
参加者	102名
1.	具志堅幸司（日本体育大学副学長：体操/体操競技） 白旗和也（日本体育大学体育学部教授） 水野洋子（日本体育大学陸上競技部パラアスリート監督） 辻 沙絵（日本体育大学陸上競技部パラアスリート：陸上競技/400m） 関根正美（日本体育大学体育学部教授） 岩岸鋭二（石川県教育委員会事務局スポーツ健康課） 三谷哲生（高知県教育委員会事務局スポーツ健康教育課） 宮田幸治（長崎県教育庁体育保健課）
2.	13：30～ 開会挨拶 谷釜了正（日本体育大学学長） 13：35～ 基調講演「わたしとオリンピックー選手として・指導者としてー」 具志堅幸司 14：05～ 講演1「オリンピック・パラリンピックの推進」 白旗和也 14：35～ 講演2「私たちのオリンピック」 水野洋子、辻 沙絵 15：05～ 休憩 15：10～ パネルディスカッション オリンピック・パラリンピック事業実施事例紹介ー地域から繋ぐ夢と希望ー コーディネーター：関根正美 パネリスト：岩岸鋭二、三谷哲生、宮田幸治 15：55～ 閉会挨拶 関根正美
3.	はじめに、日本体育大学学長の谷釜了正氏から開会の挨拶があり、スポーツを通じて平和な国際社会を作り上げていくというオリンピック・パラリンピックの理念について話があった。

＜基調講演＞

はじめに講師紹介を兼ねて、具志堅氏が出場したロサンゼルスオリンピックでの競技の様子を上映し、自身の競技経験について述べた。また、選手から指導者になった際に理想の環境・選手・支援体制を考えていく中で、それらの理想の条件が全て揃ってもチャンピオンにはなれず、失敗や挫折の体験も必要であると気付かされたとお話になった。引き続きオリンピック・パラリンピックについて、「メダルを獲得することは大事な一つの要素ではあるが、相手に勝ちたい、どうやれば日本が勝つのかと考えながらやることで、人間としてとても大事なことを学んでいく。そういった選手の姿から国民に対する勇気や希望を与えることは、オリンピック・パラリンピックの一つの使命であるように思う」と、オリンピック・パラリンピックが平和に貢献するということを私たちは忘れてはならないと述べた。

＜講演 1＞

オリンピック・パラリンピック教育について、東京都と比較して他道府県の普及は未だ十分でないと述べ、一体となって進めていく必要性、また、東京大会を一つの契機として、継続してオリンピック・パラリンピック教育を進めていく必要性をお話になった。また、オリンピック・パラリンピック精神の学習はスポーツだけではなく教育活動全体に関わるものであると述べ、教育現場でのオリンピック・パラリンピック教育の活用例を東京都の事例を交えて紹介した。さらに地域との関わり方として、日本は学校が発信していかないと保護者や地域に広がりにくいという特徴があると述べ、情報共有や目標を一緒にすることで保護者の意識も変わるということを感じていると話した。最後にオリンピック・パラリンピック教育について、できることから始めて一つ一つ広げていくような活動ができると、大変夢のある活動になるのかと思うと述べた。

＜講演 2＞

パラスポーツに転向するきっかけやリオパラリンピックまでの経験等についてお話になった。辻選手は、出来ないことは何もなく健常者として生きてきた中でパラスポーツに誘われ、健常者と障害者の葛藤を持ったまま世界大会に出場したが、大会での経験を通してスポーツに障害は関係ないと感じ、パラスポーツで金メダルを目指そうと思ったと述べた。また、リオパラリンピックでの競技の様子を紹介し、ドーピング検査等の経験から女性コーチの必要性を述べた。水野氏は指導者の立場から、女性アスリートの抱える女性としての苦悩や苦痛を、同性である水野氏が受け止めながら対応して行かなければいけないという女性コーチの必要性をととても感じたと話した。また、今後は同じようなコーチアスリート関係を築き、障害者が障害を持った悲しみや苦悩を、スポーツを通して幸せや幸福に変えていけるような指導方法を確立させて、子どもたちがスポーツをやることで障害を感じずに生きて行けるような社会を作り上げて行きたいと思っていると述べた。

<パネルディスカッション>

パネリストの3名には、各県での事業事例や反響の大きかった事例の紹介と、今後の実施に向けて述べていただいた。

石川県の岩岸氏は、非常に簡単な遊びから、場面をとらえて「卓越・友情・敬意」というオリンピックの価値を体感させる指導を見て、オリンピック・パラリンピックという素材の素晴らしさを感じたと述べた。今後に向けて、事前事後の指導の工夫により学びを“深める”こと、そして指定校から周辺校へ“広める”ことで、多くの児童生徒が関わるオリンピック・パラリンピック教育にしていきたいと話した。また、オリンピック・パラリンピアン以外の普段のオリンピック・パラリンピック教育が重要であるという認識から、一から作るのではなく、既存の教育課程の中にオリンピック・パラリンピックのエッセンスを盛り込む視点での取り組みを、広く多くの学校で実践していきたいと述べた。

高知県の三谷氏は、オリンピック・パラリンピアンと学術研究者を招いての市民フォーラムが多角的な視点からスポーツの価値について考える機会となり、好評であったと話した。行政側としても意識を変えていくための環境作りの必要性を強く感じたと述べた。今後に向けて、学校における“オリンピック・パラリンピックの学び”の実践と、競技団体関係者の中での障害者スポーツ理解に向けた取り組みを行いたいと話した。また、どうしても有名選手に目が行きがちになるが、日々の活動が大事だという視点を忘れずに、学校だけでなく競技団体も巻き込んだ展開が必要であると述べた。

長崎県の宮田氏は、オリンピック・パラリンピアンと実際に触れ合うことでトップアスリートへの憧れが高まったことはもちろん、ハイレベルなパラリンピックスポーツを見ることで、子どもも大人も意識の転換が図られたと話した。今年度の実施校は長崎県の3%であり、残りの97%にいかんを広げていくかということ課題にあげ、オリンピック・パラリンピックを家庭の話題にするというポイントも必要であると述べた。また、2月に行った教員向けセミナーを生かした4月からの学活や道徳以外での授業展開や、県アスレチックトレーナー協議会の協力を得て県内での展開に努めたいと述べた。



具志堅氏



左：辻選手、右：水野氏

資料 学校だより・新聞掲載記事一覧

1. 石川県

(1) 平成29年1月20日(金) 北國新聞



運動の楽しさ伝える
元五輪選手室伏さん
押水第一小で指導
宝達志水町押水第一小の
授業参観は19日、同校で開
かれ、陸上女子の円盤投げ
とハンマー投げで日本記録

を持ち、アテネ五輪に出場した室伏田佳さん(写真右)が児童にスポーツの楽しさを伝えた。

2020年の東京五輪に向け、子どもたちにスポーツの魅力を紹介するスポーツ庁の事業で講師として招かれた。室伏さんは3、4年生の体育の授業で指導し、グループで駆けっこをしたり、ジャンプしたりするゲームを紹介しながら児童36人と汗を流した。

室伏さんは授業の締めくくりに「運動はみんなで気持ちを一つにしてやると何倍も楽しくなる」と話した。5、6年生と保護者向けの教育講演会もあった。



オリンピック授業

寒い日が続いています、子どもたちは元気に登校しています。雪が降れば長休みや昼休みの時間に、中庭や運動場に出て雪遊びをしています。教室に帰ってきたときは、頭から湯気を出すくらい元気いっぱいです。この元気で、インフルエンザに打ち勝ちたいものです。

1月26日に、2004年アテネオリンピックにハンマー投げ日本代表として、2007年の世界選手権には、円盤投げとハンマー投げの2種目に出場された、室伏由佳さんが来校され、5年生に体育の授業をしてくださいました。今は現役を引退されていますが、室伏由佳さんの記録は日本記録として今も破られてはいません。

由佳先生（室伏さんは名前が呼びにくいので由佳先生と言ってほしいと話されました）の授業では、体全体を使ったジャンケンから始まり、コーナージャンケンというコーナーでジャンケンをして勝った人が次に進めるという運動、6人ジョギングという、スキップ、ギャロップ後ろ向きで走る、転がる等を入れた運動などでした。コーナージャンケンで、ひとりの児童が「笛が鳴ったのにゴールした人がいたのはいいのか」と聞きました。すると、すぐに良い悪いは答えずに「みんなどうする？」と聞き、「厳密にいこう」と答えていました。終わった後で、「ルールを守った人」「勝ちを譲った人」と規則を守ることの大切さや相手を思いやる心を、押し付けることなく自然に指導を通して教えているのだと感じました。すぐに答えを教えず、考えさせ、自分で答えを出させることが大切だと改めて教えられました。

授業の最後に質問コーナーがあり、その中で円盤投げとハンマー投げのフォームを見せてくださいました。素人の私が見てもとても綺麗で滑らかな動きだと感じました。一朝一夕には作り出せないフォームなんだろうと思うと同時に、たくさんの練習と努力を積み重ねてきたことが感じられました。ちなみに由佳先生の日本記録は、円盤投げ（1kg）=5.8m62cm、ハンマー投げ（4kg）=6.7m77cmです。



<学校から家庭・地域へ>

今江小だより

HPアドレス <http://www.hakusan.ed.jp/~imae-e/>

平成29年2月1日発行 NO. 26

発行者 今江小学校校長 木下浩明

TEL 0761-22-0577

FAX 0761-22-0781

E-mail imae-e@kec.hakusan.ed.jp

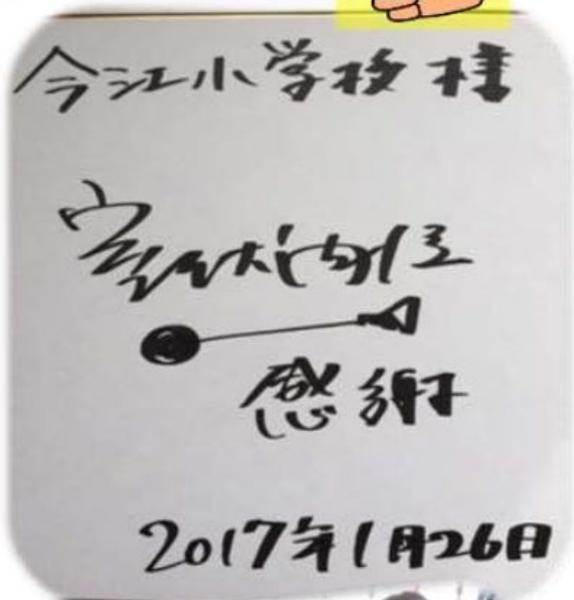
■オリンピック ^{むろぶしゆか} “室伏由佳先生” 来校！！



1月26日(木)の2限～3限、今江小学校体育館で、5年生と6年生が、由佳先生に学びました。テーマは「可能性への挑戦」です。

陸上のハンマー投げや円盤投げで日本を代表するアスリートとして活躍された由佳先生。前日から子どもたちは“ワクワク”していました。実技の時間では、由佳先生の指示に素早い反応をし、お話では集中して聞きました。授業後、由佳先生はいまえっ子を絶賛してくれました。“今江小は、すごいいいですね！”うれしいお言葉です。

日頃、学校では教師が子どもたちにいろいろ教え、共に学んでいます。しかし、本物を学ぶことはなかなか難しいことです。だから、外部からいろんな先生に来ていただいて、本物を学ぶ今回のような機会は、いまえっ子を変身させる最高の時間だと思っています。



楽しい時間はあっという間でした。
由佳先生ありがとうございます！



2. 高知県

(1) 平成29年2月26日(日) 高知新聞

選手見守る楽しさ実感 高知市 体操の田中さん講演

スポーツセミナー「ス」で演技したため、緊張でポーツの力(スポーツの「頭がふわふわ」)していた魅力や価値を考える」が25日、高知市の追手前高校芸術ホールで開かれた。2012年ロンドン五輪体操代表の田中理恵さんの講演を通じて、聴衆がスポーツへの関心を高めた。

田中さんは、ロンドン五輪に兄の和仁選手、弟の佑典選手と出場。最後の五輪かもという気持ちで演技したため、緊張で頭がふわふわしていた。そのため演技の記憶がなく、平均台の後、「仲間に『落ちてなかった?』と聞いてしまった」と振り返った。

現在は東京五輪組織委員会理事を務め、「以前は選手が一番楽しいと思っていたが、一瞬に懸ける選手の頑張りを間近に見て、見守る側もこんなに楽しいんだと実感している」と語った。

続いて、波多腰克晃・日体大准教授や1998年長野パラ五輪のアイススレッジスピードレース金メダリストのマセソン美季さんも講演した。

同セミナーは県教委と県体育協会がスポーツ庁の委託を受け、日体大と共催。今年は生涯スポーツ推進県民会議の一環として行われた。

この日は、生涯スポーツの普及振興に功績のあった18個人、4団体の表彰式も行われた。

(山下正晃)



「表現力を高め、美しい体操を極めようと取り組んできた」と話した田中理恵さん
(追手前高)

3. 長崎県

(1) 平成28年12月14日 西海市立大串小学校 学校だより 第26号

ポセイドンジャパン来校！



12月13日（火） リオ五輪の水球競技日本代表選手（通称：ポセイドンジャパン）を4人お招きし、子どもたちとの交流会を行いました。

水球は、プール内に作られたコートの中にボールを入れ合い、点数を競い合う競技です。ボールを手で扱うことから、「水中のハンドボール」とも呼ばれています。日本チームは、今回、32年ぶりにオリンピックに出場しました。私もテレビでしか見たことはないのですが、試合中、相手と激しく接触することも多く、さながら、「水中の格闘技」です。

交流会では、選手の皆さんとゲームやパスの練習をしたり、実際にボールを使ったデモンストレーションを見せていただいたりしました。

会場には、オリンピックの開会式で着用したユニフォームなども展示されており、子どもたちも興味深そうに見ていました。現役のオリンピックと出会い、改めてスポーツの素晴らしさを実感した1日でした。



長与町立長与第二中学校

平成28年度学校だより

東雲の風 自主・友愛・礼節

平成28年12月16日

第33号 文責：校長

夢に向かって～オリンピックメダリスト講演会～

12月12日(月)14:55から、オリンピックアテネ大会・北京大会の2大会で連続して、競泳200M背泳ぎに出場し、見事、連続して銅メダルを獲得された 中村礼子さん に来校していただき、体育館で講演会を開催しました。内容を要約して掲載します。



オリンピックの価値について

オリンピックの旗は、オリンピックを創設したクーベルタン男爵によってデザインされました。この旗は、青・黒・赤・黄・緑の5色の輪と背景の白の6色が使われています。世界のほとんどの国旗は、この6色が使われているそうです。オリンピックには、創設以来、以下の3つの価値があります。

- ①卓越 (Excellence) 「ベストを尽くす」
- ②友情 (Friendship) 「協力・助け合い」
- ③敬意・尊重 (Respect) 「感謝・思いやり」

これらの価値は、オリンピックだけではなく、人生において、とても大切な心や考え方です。オリンピックは人生の一つのモデルと考えてもらいたいと思います。

努力について

あえて「勝利」と「努力」のどちらが大切かと問われれば、「努力」が大切だと言います。「努力」は夢を叶える力です。「オリンピックに出場すること」や「メダルを獲得すること」は、簡単なことではありません。自分自身も、いろんな好不調の波を乗り越えて、出場し、メダルを取ることができました。努力を積み重ねてとれたメダルです。だからこそ、メダルを獲得した瞬間に大きな充実感を得ることができました。壁にぶち当たることは多いと思いますが、そこで努力する力を培ってもらいたいと思います。

パラリンピックの基本理念について

パラリンピックの創始者であるルートヴィヒ・グットマン博士が唱えた基本理念は、「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に活かせ」です。私たちにも、失って初めて気づく部分があります。皆さんには、現在、自分が持っている力を活かして欲しいと思います。

自分の夢を見つけよう

今、夢はありますか？少しずつ夢が見つかる年代が、中学生の頃です。私も、全国中学校体育大会で初めて日本一になったのが中学2年生の時であり、その時からオリンピック出場という夢を持ち始めました。夢を見つけ、その夢を実現するために、

- チャレンジしてみよう！
- 続けてみよう！
- 楽しいと思うこと～勝つことや自己ベストを出すことなどの喜びは楽しさにつながります。
- 悔しいと思うこと～この思いをすればするほど、強い人間になれます。失敗こそチャンスであり、悔しさは力になります。

夢は「叶ったらいいな」ではなく、「必ず叶える」と考えることが大切です。思いが強くないと叶えることはできません。頑張るときは、「もうだめだ」と思った時が始まりです。

支え、そして支えられ

2003年世界水泳に初めて出場した時は2日目です。予選敗退でした。1週間の試合スケジュールでしたので、5日間はすることがなくなりました。たいへん落ち込んで、部屋に閉じこもっていた気持ちになりましたが、チームのために何かやろうと思い、食事の準備を手伝うことにしました。そこで、自分の殻に閉じこもらなかったことが、後のオリンピックアテネ大会への出場、そしてメダル獲得につながったと思います。

アテネ大会で銅メダルを獲得した後の4年間もたいへんでした。特に、「次の北京大会に出られなかったらどうしよう」という、プレッシャーがかかりました。これに耐えることが出来たのは、両親、コーチ、チームメイトの支えがあり、泳ぎ切ることができたからだと思います。夢はたくさんの方々の支えがあって実現できるものです。応援される人、たくさんの方々の支えがいてください。そのために必要なことは、「感謝」の気持ちを持つことです。



講演の最後に、貴重なメダルを見せていただきました。子どもたちは、食い入るように見ていました。子どもたちの心には、貴重なお話と共に、強烈に残ったと思います。

東京から日帰りでお越しいただいた講師の中村礼子さんには心より感謝いたします。また、この講演会をご提供いただきました教育委員会にも、感謝いたします。皆様、ありがとうございました。

小さな目標達成 大きな夢の実現に

北京五輪バドミントン男子複5位
大東さん 香焼小で講演

「夢」や「五輪」をテーマに語る大東さん
長崎立香焼小



北京五輪バドミントン男子複5位入賞した日体大准教授の大東忠司さん(38)が15日、同市香焼町の市立香焼小(佐藤久美子校長、186人)を訪れ、「夢」や「五輪」をテーマに講演した。

2020年東京五輪に向けた機運醸成などを目的に県教委が推進する「県オリピック・パラリンピック啓発事業」の一環。

大東さんは「目先の小さな目標をいくつも立て、一つずつ達成していくことが大きな夢の実現につながる」と強調。五輪の開催目的が「世界平和」であることも紹介した。児童とバドミントンでの対戦などもあり、大東さんがスマッシュ

を放つと、児童たちは歓声を上げた。

(宮本宗幸)

川床小学校 学校だより



風は未来へ

No. 39

平成28年12月21日

雲仙市立川床小学校

校長 本田恭子

早いもので、12月も半ばを過ぎました。明日は、2学期の終業式です。今年は暦の関係で例年より2日早い終業式となります。学校で一番長い2学期の締めくくり、元気に終業式を迎えたいものです。



オリンピック・パラリンピアンによる講演会

12月14日(水)に本校において元新体操選手 村田 由香里 先生をお迎えして講演会を行いました。これは、スポーツ庁の委託を受けた日本体育大学が長崎県・高知県・石川県の3県を普及・推進地域として展開する「オリンピック・パラリンピック啓発事業」によるもので、本校は事業推進校(小学校9校、中学校3校、高等学校4校、特別支援学校1校)として指定されたものです。

講師の村田先生は、新体操でシドニー・アテネ両オリンピックに出場され、現役時代は全日本選手権女子個人総合6連覇という輝かしい成績をおもちのオリンピックです。当日は、日本体育大学新体操部の学生4名とともに来校され、70分間の講演をしてくださいました。

最初に自身の選手生活を振り返り、努力することの大切さについて話されました。次に体操の実技指導があり、子どもたちは、体を動かす楽しさや仲間とともに運動する喜びを感じながら、元気に活動しました。学生による新体操の演技もあり、中身の濃い充実した学びの時間となりました。東京オリンピックが開催される4年後、子どもたちは、どのように成長しているのでしょうか。



講演の最後には、このような話をされました。

「成長するためには仲間が必要である。友達を大切にし、お互いを思い合うことが大事。周りに感謝する気持ちを忘れてはならない。

これを大切にしているのがオリンピックであり、世界平和につながっていくもの。」

初めて知るオリンピックの意義に子どもたちは、真剣に聞き入っていました。



「わあ、すごい！」オリンピックのわざに感動 ～ 中田大輔選手来校 ～

体育館中にこだまする「わあ、すごい!」「おおっ」という歓声。これまでテレビでしか見たことがないオリンピックのわざが、目の前で繰り広げられます。世界ランク1位にもなったことがある元オリンピック選手の中田大輔選手が昨日岐宿小に来校。トランポリンの実演で私たちを魅了してくださいました。最初にオリンピックにかかわる講演を行い、スポーツをとoshite学んでほしいことを分かりやすい言葉で、しかも熱い思いをもって伝えました。



オリンピックで学んだこと、大切にしていることが3つある。1つ目は「ベストを尽くすこと」。メダルよりも、「がんばろう」という気持ちが大事だ。2つ目は「友情・協力・助け合い」。困っている人がいたら手を貸すこと。3つ目は「感謝・思いやり」。スポーツができるのは、お世話をしてくださる人がいるから。そしてみんなに伝えたいのは、苦手なことでも逃げずに挑戦してほしいこと。1日1cmでもいい。苦手なことをがんばれば、いつかは天井にたどり着く。そうすればその高い壁の向こうの世界が見えるんだ。

その後、トランポリンの解説を交え、オリンピックで演じる大技や、縄跳びとボールを使ってのジャンプ、空中でスポンをはく芸などを見せて楽しませてくれました。最後は体験コーナー。子どもや職員がアドバイスを受けながら楽しく空中に跳び上がっていました。閉校の年にまた一つ、大切な思い出ができました。



トップアスリートの講話！(スポーツ委託オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業)

12月19日(月)、パラリンピックに4回(アテネ・北京・ロンドン・リオ)出場されている車いすマラソンの「副島正純」選手に来校していただきました。12月11日(日)に行われたハワイのホノルルマラソンで4連覇(10回目)の優勝を果たし、「2日前に日本に帰ってきたばかりです。」ということでした。講話のテーマは、「挑戦」～今 私にできること～です。

諫早市在住の46歳でトップアスリートとしては年齢的にきつくなっているが、4年後の東京パラリンピックまで頑張るとのことでした。障がい者に対する考え方というより、何かきついことがあっても、悲観ばかりするのではなく、「前向き」な考えで過ごすことが重要であり、幸せな人生につながるという、ご自身の実感も込めて講話は、聞いているものが元気をもらえるものでした。お礼のあいさつでは、3年生の中川愛華さんが、「できないことを数えるのではなく、できる可能性を伸ばす。という言葉に心を動かされました。」というコメントで締めくくりました。



オリンピック講演会



12月21日(水)トランポリン元オリンピック選手の中田大輔氏の講演会が、本校体育館で行われました。保護者の方々も集い、熱気に満ちた素敵な講演会になりました。中田選手が、空中に舞い上がってみせる回転技には、大歓声が起こりました。次々と披露される空中でのパフォーマンスは、今までに見たことない感動がありました。オリンピック出場という夢を叶えた中田選手との貴重な時間は、子どもたち自身のもつ夢との距離を少し縮めることができたのかなと思います。

苦しいことから、逃げないこと！あきらめないこと！勝つことよりも、目標に向かって全力で取り組み努力を続けること！など、たくさん教えてもらいました。

★大きくふくらんだあこがれ！ まるで夢のような時間でした



中田大輔先生

12月21日、シドニー・オリンピックにトランポリン競技の日本代表選手として出場され、現在は日本体育大学で後進の指導にあたられている中田大輔先生をお招きして、講話と実演を行っていただきました。これは、2020年の東京オリンピック・パラリンピック啓発事業の一つで、長崎市では2校の子どもたちだけが受けられる“スペシャル授業”だったそうです。超ラッキー(〇)！ご自身の体験をもとにしたお話は説得力抜群で、きっと皆の心に深く刻まれたと思います。また、目の前で観る一流アスリートの演技に、子どもも大人も「かっこいい!!」を連発しながら大興奮。最後には、12人の子どもたちと一緒にトランポリンを体験させていただくことができ、感動あり、笑いありの夢のような1時間でした。

私たちはメダルを獲得することを目標にしていますが、それよりも大切なことは「ベストを尽くす」「友情・協力・助け合い」「感謝と思いやり」の三つです。トップ選手たちは、よいプレーや演技で世界中の人たちに感動を届けたいと思っています。勝つことよりも努力すること・したことが大事。努力を続ければ、その先にまた新しい世界が必ず見えてきます。ぜひ、皆さんも自分の目標に向かって全力で取り組み、努力を続ける人になってください。—中田先生のお話から(抜粋)—



トランポリンの技は、美しさ・難しさ・高さで勝負。体育館の天井にも届きそうなジャンプに驚嘆！



空中で宙返りをしながらズボンや上着を着る演技で会場騒然。縄跳びやボールのドリブルも。



伸身宙返りやおしり・お腹・背中バウンドするなど10種の技を自由自在にきめる、素晴らしい演技。

2017年(平成29年)1月26日 木曜日

紙面編集・永野孝

東京五輪・パラ組織委理事 田中 理恵さん (元ロンドン五輪体操代表)



高校生に「夢や目標を諦めないで」と話した田中さん 大村工業高

「目標達成には犠牲も」

大村市森園町の県立大村工業高(木戸隆校長、950人)で24日、2012年ロンドン五輪の体操代表で20年東京五輪・パラリンピック組織委員会理事を務めている田中理恵さん(39)が「オリンピックとわたし」家族が支えてくれたもの」と題して講演した。

東京五輪に向けた機運醸成などを目的に県教委が推進する「県オリンピック・パラリンピック啓発事業」の一環、体操一家で育った田中さんは、中学3年のころ、足

大村工業高で講演

首のけがと成長期の体の変化で技ができなくなったと振り返り、「高校時代は反抗期も相まって苦悩した。あつて今がある」と語った。また、進学するかどうか迷った時期に、弟の佑典さんから「そろそろ真剣に体操を」やれ」と言われたことで奮起したと明かした。大学1年で足首の手術を決断し、周りのサポートや、体操ができる喜びを知ることができた」と話した。

高校生に対しては「目標達成するためには何かを犠牲にしなければならない。何を一番大切にするのか考えて、夢や目標を諦めないで」とエールを送った。

(左海力也)

オリンピック・パラリンピック啓発事業

この事業は2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催を3年後に控え、オリンピズムの普及を図り、未来のアスリートや青少年のスポーツに関する関心を高め、世界市民としての目覚めをサポートするために日本体育大学の協力体制のもと行われています。

本校では、陸上競技やり投げでロンドン・リオの2つのオリンピックに出場された海老原有希選手に講演していただきました。海老原選手は高校3年次に長崎夢総体において7種競技で優勝し、その後日本選手権やり投げで8回優勝。その間日本記録を4回更新し、ご自分の持つ63m80が現在の日本記録です。日本陸上女子やり投げの第1人者としてご活躍されています。

競技としてのみ捉えがちなオリンピックですが実際選手に大会期間中の生活を伺うと、地元の観客やボランティアの人達、あるいは大会関係者の人達との交流の様子が楽しげに語られました。オリンピックという世界大会が身近に感じられた講演会でしたし、是非東京でのオリンピックには何らかの形で携わりたいと参加した人々に感じさせた講演会でした。



おわりに：今後に向けて

本事業では、石川県、高知県、長崎県の連携のもとに、オリンピック、パラリンピックの理念に基づきながらオリンピック・パラリンピック・ムーブメントを展開して参りました。オリンピック、パラリンピックによる講演や体験講座では、それに参加し関わった人々への励ましを贈り、青少年にオリンピック・パラリンピック・スポーツへの夢や希望を与えるなどの効果を生み出すことができました。

しかし同時に、これからの課題も明確になりました。それは、スポーツを通じた平和でよりよい社会の実現と世界市民の醸成というオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの根本的な理念にどれだけ迫れたかとの点です。われわれは東京オリンピック・パラリンピックを単に盛り上げるという次元ではなく、広く社会と人類のためのムーブメントが求められているのだということを忘れずに事業を進めていかねばなりません。

最後に、本事業に理解を示し連携していただいた石川県、高知県、長崎県の教育庁および推進校の皆様、講演や講座をお引き受け下さったオリンピック・パラリンピックの皆様、関係諸団体の皆様には年度途中の急なお願いにも拘わらずご協力いただき、ありがとうございました。本事業担当者を代表してお礼申し上げます。本事業がささやかながらも社会の役に立ち、2020年の東京大会開催が意味を持つことを願って結びといたします。

平成29年3月

スポーツ庁委託事業オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業
日本体育大学実施担当責任者 教授 関根正美

事業実施体制

■事業統括	谷益 了正	日本体育大学学長
■事業副統括	具志堅 幸司	日本体育大学副学長
	松井 幸嗣	日本体育大学副学長・体育学部長兼務
■実施担当責任者	関根 正美	日本体育大学教授・オリンピックスポーツ文化研究所長
■実施担当者	石井 隆憲	日本体育大学教授・大学院研究科長
	白旗 和也	日本体育大学教授・スポーツプロモーション・オフィスディレクター
	中里 浩一	日本体育大学教授・総合スポーツ科学研究センター長
	田中 信行	日本体育大学教授・アダプテッドスポーツ学研究室
	●オリンピックスポーツ文化研究所員	
	笠井 里津子	日本体育大学教授・ダンス・伝統芸能
	成田 和穂	日本体育大学教授・スポーツ医学
	依田 充代	日本体育大学教授・スポーツ社会学
	津田 博子	日本体育大学教授・ダンス・伝統芸能
	荻 浩三	日本体育大学教授・スポーツ史
	近藤 智靖	日本体育大学教授・スポーツ教育学
	須永 美歌子	日本体育大学教授・運動生理学
	亀山 有希	日本体育大学准教授・スポーツ社会学
	波多腰 克晃	日本体育大学准教授・スポーツ哲学
	佐野 昌行	日本体育大学助教・スポーツ経営管理学
	仲間 若菜	日本体育大学助教・ダンス・伝統芸能
	張 巧鳳	日本体育大学助教 院・スポーツ文化・社会科学系
	●日本体育大学オリンピックズクラブメンバー	
■事務局長	藤野 雅博	
■企画部長	勝田 真也	
■事業推進スタッフ	秋和 真澄	日本体育大学特別研究員
	石川 直	日本体育大学特別研究員
	増田 莉沙	日本体育大学嘱託職員
■業務管理	総合スポーツ科学研究センター	
■経理管理	管理部会計課	

平成 28 年度スポーツ庁委託事業
オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業報告書

平成 29 年 3 月 31 日

発行：日本体育大学オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業

東京都世田谷区深沢 7 丁目 1-1

TEL: 03-5706-0923

FAX: 03-5709-0961

ウェブサイト：<http://www.nittai.ac.jp/ncope/index.html>

